文学探訪

（２００５年５月～２００９年６月）

著：小田島　本有

（釧路工業高等専門学校　教授）

編集：北海道中小企業家同友会釧路支部

【 筆者プロフィール 】

小田島　本有（おだじま　もとあり）

昭和32年　札幌市に生まれる。
昭和51年　札幌西高校卒業。
昭和57年　北海道大学文学部卒業（国語国文学専攻）
昭和62年　同大学院修士課程修了。
現在、釧路工業高等専門学校一般教科教授。
専門は日本近代文学。
同友会幹部大学で文学の講義を担当している。

【文学探訪とは】

筆者が北海道中小企業家同友会釧根事務所のホームページに掲載するために執筆している連載コラム。日本近代文学の巨匠達の作品を紐解き、独自の解釈を述べている。
2005年5月から連載がスタートし、2009年6月に50回を迎えた。

1. 夏目漱石 『坊っちゃん』 2005年5月

『坊っちゃん』に郷愁を覚える読者は多い。この作品は永遠のベストセラーだ。

私がこの作品を初めて読んだのは中学生のとき。四国の中学校を訪れた主人公が、その赴任先で出会う人々に対して、「赤シャツ」「野だいこ」「山嵐」「うらなり」などと次々にあだ名をつけていく。その命名がその人物の特徴を見事に捉えている。リズミカルな物語の展開も魅力的だ。結末で主人公が山嵐と一緒に赤シャツと野だいこを成敗する場面に心すくような思いも味わった。

しかし、中年期を迎えた今、改めてこの作品を読み返してみると、この主人公の無責任さが却って目に付く。

宿直の日、彼はのこのこと温泉へ出かけている。中学校に勤務したのはたかだか一ヶ月程度。彼が破天荒な行動をとれたのも、彼が本来この学校で腰をすえようという意志を持っていなかったからだ。もし同僚にこのような男がいたならば、周囲はかなり迷惑を被っていたに違いない。我々読者がこの主人公に爽快感を感じるのは、自分たちが彼のようには行動できないからである。

ただし、この男にも愛すべき点があった。それは彼が本音と建前を区別できる人間ではなかったこと。赴任の日、「生徒の模範になれ」という校長の訓話を聞いて慌てて辞令を戻そうとした行動に、それは端的に現れている。

彼には言葉のオモテもウラもなかった。彼が赤シャツにあれほど反発を感じるのはそのためである。赤シャツは大人の社会をうまく渡っていけるだろう。その点から言えば、この主人公は「大人になりきれない人間」と見ることも可能だ。タイトルの「坊っちゃん」には未熟さの意味合いが込められている。

しかし、「坊っちゃん」の意味するところはこれだけではない。下女だった清が、彼をいつも「坊っちゃん」と呼んでいた。幼い頃、彼は自分をひたすら可愛がる彼女に不審の念すら抱いている。しかし、四国で赤シャツをはじめとする人間たちに出会い、人間社会の醜さに触れることで、彼は清の美質に気づかされる。この作品は「清を再発見する物語」であるとも言えよう。

清はもうこの世にはいない。それだけに、自分をひたすら愛してくれた彼女への愛惜の思いをこめて、主人公は語り続ける。「坊っちゃん」という彼女の肉声が今主人公の脳裏に甦る……。

2. 島崎藤村 『破戒』 2005年6月

「素性を隠せ」という父親からの戒めを破る物語、それが『破戒』である。主人公瀬川丑松にとっては、破戒という行為そのものが自らの殻を打ち破ることに他ならなかった。

しかし、この行為そのものは決して勇ましいものではない。既に彼が勤務する小学校の教員たちの間では、丑松が部落民らしいという噂は広まっており、彼が自分の素性を告白するのはもはや時間の問題であったからである。しかも、彼は教室で「許してください」と生徒の前で土下座までしている。この姿を惨めなものとして感じるのは無理もない。

ただし、この作品には父親の庇護からの脱却という側面もあった。父親は息子の将来を思うがゆえに「隠せ」と戒めた。しかし、そのこと自体に丑松は疑問を抱き始める。そこには、自らの素性を決して恥じることなく、「我は穢多なり」と広言して憚らない社会運動家、猪子蓮太郎の存在があった。せめてこの先輩にだけでも打ち明けようと丑松が思い立ったとき、蓮太郎は暴漢によって暗殺される。打ち明けるべき相手を失ったとき、その告白の対象が拡大されるところに藤村の描く主人公たちの特徴がある。

この作品は小学校が舞台となっている。明治の新政府となり、それまでの身分制度は形の上では解消されたはずであった。しかし、差別の構造は厳然として残っている。本来は新しい時代の息吹を伝えるべき教育現場において嫉妬と羨望、更には蔑視が渦巻く。学校もまた社会の雛型であった。

その中にあって、作者藤村はこの作品に夢を託した。

その一つが、士族の娘であるお志保が、丑松の素性を知ってもなお、むしろ知ったがゆえにと言うべきか、なおさら彼を思う気持ちを確かなものにしたということ。どちらかというと寡黙で、それまで苦しい境遇を耐え忍んできた彼女であるだけに、この決意の強さはとりわけ印象的だ。

結末で、テキサスへ旅立とうとする彼を慕い、彼の可愛い教え子たちが大挙して見送りにくる。差別は未だなくならない。だが、この子供たちが大人になる頃には丑松のような思いをする人がいなくなってほしい。そのような気持ちを藤村はこの場面に託したのではないだろうか。

3．森鴎外 『舞姫』 2005年7月

男と女が深く関わるということは、相手の存在を丸ごと抱えることに他ならない。では、大田豊太郎は異国の地で出会ったエリスに対してそのような覚悟を果たしてもっていたのであろうか。

踊り子であったエリスの悲惨な境遇を目の当たりにし、彼女を経済的に救おうとした彼の行為には、明らかに憐憫の情があった。しかし、留学先で他の日本人仲間と行動を共にすることができず、いわば孤高（孤立）状態にあった彼にとって、エリスはまさに癒しの対象だった。彼女との関係を留学生仲間から誹謗中傷された彼は、免官に追い込まれ、出世の道はいったん断たれたかに見える。エリスとの同居生活はこうして始まった。

ただ、彼には幼少期から培われた立身出世の思いが拭い難くあった。友人相沢謙吉の手引きで天方伯に通訳として随行することに彼が同意したのも、あわよくばという思いが心のどこかに潜在していたからだ。この随行によって豊太郎はその実力を認められ、帰国を促される。このときエリスは妊娠していた。帰国に同意することはエリスを捨てることに他ならない。だが、彼は「否」と答えることができなかった。自己呵責にさいなまれながら雨の中ようやく家に辿り着いた彼は、玄関先で倒れ、数日間人事不省に陥る。そして、意識が目覚めたとき、彼が目にしたのは、精神に異常をきたしたエリスの姿である。豊太郎に代わって相沢から事情を知らされた彼女は、「我をば欺きたまひしか」と豊太郎を罵り、その場で卒倒したという。

豊太郎はエリスの妊娠を知らされた時から驚愕を示しており、そのことに喜ぶ彼女とは全く対照的であった。豊太郎は彼女との関係を今後どうするのか、本音で彼女と話し合うことをこれまでもしてこなかったし、必要な時点でしかるべき判断（選択）をしてこなかった男である。これは忠実な官僚として生きることを要請された彼らしい態度であったと言えよう。

今帰国の船の中で、豊太郎は相沢を憎む心が介在していることを最後に告白する。だが、それは責任転嫁というものだろう。それまでエリスと本当の意味でのコミュニケーションをしてこなかったことがこの悲劇の大きな要因だ。そのことに豊太郎は今でも気づけないでいる。

人間には決して法律では裁くことのできない罪というものが確かに存在する。法学士である豊太郎にはそのことがどの程度自覚されているのであろうか。そこに厳しい自己凝視の姿は見出すことができない。

4. 宮澤賢治 『銀河鉄道の夜』 2005年8月

賢治の最大の理解者であった妹トシが肺結核のため亡くなったのは彼女が24歳のときのことである。このときの模様を彼は「無声慟哭」「永訣の朝」といった詩に書き留めたが、その後半年の間詩の創作が不可能になったという事実からも、彼がこのとき受けたショックがいかに大きいものであったかが伺える。トシは亡くなったが、彼女の魂はまだ成仏できずにさまよっているのではないか、そのような思いを彼はなかなか払拭することができなかった。

『銀河鉄道の夜』は、ジョバンニが友人カムパネルラと共に銀河ステーションから列車に乗り込み、旅を続ける物語である。この列車にはさまざまな人が乗り込んでくる。中には氷山にぶつかって沈没した豪華客船タイタニックの乗客もいた。幼い姉弟と家庭教師の青年は自らが犠牲となって、他の乗客にボートを譲ったと語る。彼らだけではない。この列車に乗り込んできた人達はいずれも死の影を帯びていた。

本当の幸いとは何か。これがこの作品を貫く基本テーマである。

途中蠍（さそり）の話が女の子によって語られる。それまで他の生物を食べて生きてきた蠍は、いざ自分がいたちに追われて井戸に落ちてしまったとき、みんなの幸いのためにこの体をお使いくださいと祈った。するといつしか蠍は美しい火となって夜の闇を照らし始めたという。これは蠍座誕生にまつわるエピソードだ。

そして、夢から覚めたときにジョバンニが目にしたのは、川におぼれた友人を助けようとして飛び込んだカムパネルラが行方不明になり、多くの人々が集まっている光景だった。「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか」カムパネルラは列車の中でこう漏らしていた。人を助けるために自分が犠牲となる行為は確かに美しいし、称賛に値する。しかし、そのことは一方で肉親を悲しませることにもなる。生きるというのは本来こうした矛盾を抱え込むことに他ならない。

ジョバンニは川べりでたたずんでいるカムパネルラの父親の所へ駆け寄り、今まで自分はカムパネルラと一緒にいたのだと必死に伝えようとする。しかし、このとき喉が詰まってしまって何も言うことができない。これはこの作品のクライマックスと言えよう。

賢治は、『銀河鉄道の夜』を書くことによって、ようやく妹の死を乗り越えることができた。個人の死をたんなる悲しみの対象として捉えるのではなく、もっと大きな宇宙の中の営みの一つとして捉え直すこと。その壮大なスケールに我々はただ圧倒されるばかりである。

5. 有島武郎 『生れ出づる悩み』 2005年9月

人に語りかけるということは、とりもなおさず自分に語りかけるということではないのか。有島武郎の『生れ出づる悩み』を読むたびにその思いは強くなる。

この作品は、語り手である「私」が滞りがちな筆をなんとか動かそうとする自分の姿を冒頭に描いていた。そのときに思い浮かぶのが「君」のことである。

この作品では、「君」との出会いから始まり、絵を描きたいという願いと家業である猟師としての仕事との狭間で悩み続ける「君」の姿が浮き彫りにされていく。

しかし、考えてみれば、第三者ならまだしも当事者である「君」にそのことを語る必然性は本来ない。だとすれば、この語りそのものが「君」のためというよりも、「私」自身のためであったと考えなくてはならないだろう。

「私」は芸術家であった。おそらく執筆をする作家なのであろう。その彼が作品の冒頭で、執筆の苦しみを描いていたということは、「私」もまた「君」と同様＜生れ出づる悩み＞を抱えた人間であったということである。

「私」は「君」に寄り添い、共に悩む。しかし、そこには自分とは全く異なる生活環境で逞しく生きる「君」の生活を擬似体験したいという、作家としての本能的な欲求が込められていたことを見逃すべきではない。

暴風雨の海で必死になって自分を支えようとする「君」、あるいはもう耐えられなくなって自殺を思い、崖の上までやってくる「君」の姿を描写する「私」の語りは、まるで「私」がその場にいたかのようなリアリティをもって迫ってくる。「私」は「君」とすっかり同化する。そして共に荒れ狂う海と戦い、一方では共に悩んで涙を流すのである。これは不在者「私」がその場を再現しようとする、作家としての賭けに他ならなかった。「私」はこれらを通じてカタルシス（精神の浄化作用）を得る。そして、作品の冒頭でなかなか筆が進まず創作不能に陥っていた「私」は、「君」に寄り添うことで一つの作品を作り上げることができたのである。

結末で「私」は、「君よ、春が来るのだ。」と雄々しく語りかける。この昂揚感は、まさに「君」に寄り添う擬似体験をくぐりぬけ、作品を作り上げたという達成感に裏付けられたものだ。語ること、それはすなわち自らを昂揚させることに他ならない。

6. 井上靖 『猟銃』 2005年10月

人には自分の内に秘められたものを誰かに知ってもらいたいという欲求があるのだろうか。「猟銃」という詩を読んで、そのモデルは自分に違いないと三杉穣介は思った。それを作者である「私」に手紙で書いてよこした行為はそれなりに頷ける。ただ、彼の場合、「私」が詩の中で書いた「白い河床」なるものを知ってもらいたいとの思いから、最近自分に寄せられた三人の女性からの手紙を後日送り届けてきたことが、ある意味常軌を逸している。

天城山麓の山道ですれ違った中年紳士と「私」はただそれだけの関係である。ましてやそのときの紳士が三杉であるという確証もない。しかし、「私」が詩の中で表現した「どこか落莫とした白い河床」、「中年の孤独なる精神と肉体」という言葉を、三杉は自分のものとして受け止め、「私」を類い稀なる慧眼の持ち主と判断した。読者をそのような方向に導いたというのは芸術の力と言っていいかもしれない。 三杉に寄せられた三人の女性の手紙は、いずれも彼に別れを告げているという点で共通している。姪の薔子には母親と三杉の関係を知った以上、もう三杉には会うことはできないと告げられる。妻のみどりは、夫と彩子の関係は13年前から知っていたこと、そしてもう離婚することがお互いのためだと淡々と述べる。そこには何の未練も感じられない。そして、彩子は二人の関係をみどりに知られた以上、もう自分は生きていくことはできないとして、自ら命を断つことを知らせて寄越した。彼女からの手紙は遺書だったのだ。

かつて二人で「世間の人全部を騙し通しましょう」と誓い合ったとき、その「世間の人全部」の中には当の相手である三杉も含まれていたという彩子の告白は、読者を十分驚愕させるだろう。彩子にはかつて夫の門田が女性と間違いを犯したことが許せず、頑なな態度で離婚したという過去があった。彼女自身、その後門田のことは忘れていたとはいうものの、その事実がしこりとなって残ったことは事実である。彼女は三杉を自ら積極的に愛したのではなく、三杉の要求に流されたのだ。ただ、そのことで彼女は不幸だったわけではない。彼女自身、「幸せだった」と述べている。ただ、彼女は「愛する」ことよりも「愛される」ことを望んだ女性であり、死を前にした今そのような自分を後悔する思いがないわけではない。

三杉は、「人間は誰でも身体の中に一匹ずつ蛇を持っている」と彩子に語ったことがあった。彩子もまた蛇を潜ませた人間であったことを、彼女の遺書は教えてくれる。

この手紙を三杉はどう受け止めたのであろうか。作品では何も触れられていない。それを考えるのは我々読者の想像力に委ねられている。

7. 芥川龍之介 『地獄変』 2005年11月

『地獄変』は、娘を犠牲にしながらも地獄変屏風を完成させた画師良秀や、その対抗者であり時の権力者でもあった大殿にともすれば注意が向けられがちである。確かに、良秀の娘を身動きできぬ状態のまま御車に乗せ、そこに火をつけさせた大殿の命令はもとより、その光景を目の当たりにして絵筆をとり始めた良秀の行為は共に狂気を帯びている。その衝撃的な異常性が読者の心を捕らえるというのは、ある意味で無理もない。

しかし、この作品が大殿に20年来ご奉公していた「私」によって語られているという事実を見逃すわけにはいかないだろう。「私」は大殿の威光がいかに並々ならぬものであったかを冒頭で語っていく。だが、仔細に眺めてみると、大殿の権力というのが民衆たちの恐怖の上に成り立っていたことが伺える。大殿の御車から牛が放たれて、老人に怪我を負わせた時、この老人は手を合わせて「有り難がった」という。我々はこの老人が「有り難がって」いると解釈すべきではないだろう。大殿に関する妙な噂も瞬時に掻き消されてしまう。自分が噂に関わっていたことが露顕した場合にどのような危害が加えられるか、民衆たちは痛いほど知っていたのである。

それだけに、良秀の傲慢ぶりが際立つのであり、大殿が彼を屈服させようとした所以がここにある。大殿の狙いは、良秀を画師として敗北させることであった。良秀は「見たものでなければ描けない」芸術家である。

地獄変屏風のあらましはできあがった、と良秀が申し出たとき、大殿は力のない表情をしていた。しかし、一ヶ所描けないところがあると聞いて、大殿の表情は一変する。どこが描けぬか畳みかけるように尋ね、ついにはその光景を現出させようと宣言したときの大殿はまるで狂気に駆られたような興奮ぶりを示した。大殿はこの時、自らの勝利を確信したのである。業火に包まれたわが娘を目の当たりにすれば、良秀は自分に助命を嘆願するに違いない。描けない良秀を人の目に晒すこと。これが大殿の狙いだったのだ。

しかし、大殿の狙いは外れた。良秀は火に焼かれる娘を目の当たりにしながら、その光景に見入っていたのである。そして地獄変屏風は完成した。

語り手「私」は決して大殿を非難する言葉を発しないし、大殿の敗北を宣言しない。それは長年権力者のもとに仕えてきた人間の巧みな自己保身の術であった。だが、大殿の敗北は、彼の表情を凝視する「私」の眼がしっかり捉えている。

8. 志賀直哉『城の崎にて』　2005年12月

主人公が電車事故に遭い、後養生のため訪れた温泉地で目撃した幾つかの小動物の死。漠然と死の不安を抱えた主人公にはそれらが決して他人事とは思えない……。これは実際に作者の実体験が素材となっており、いかにも随筆風なさりげない書き方がされているが、小説の中では目撃した小動物の死の順序が変えられており、そこには明らかに小説家としての構成意識を読み取ることができる。

主人公は電車事故で九死に一生を得た。医者からは、脊椎カリエスになれば致命傷になりかねないが、二、三年でそれが出なければ心配はいらないと言われる。主人公はいわば宙ぶらりんの状態。だが、静かな城崎温泉で時間を過ごす中、死そのものに対する親しみが湧いてきていることも主人公は語る。

しかし、その思いが掻き乱される場面に主人公は遭遇した。魚串を喉に刺され、人間たちの投石から必死になって逃げようとする鼠を主人公は目撃する。主人公がこのとき抱いた嫌悪感は、ふざけて投石を繰り返す人間たちにも勿論向けられていたが、それ以上に生物が死に至るまであのような苦しみを避けて通れないという事実を目の当たりにしたことが大きい。それ以前に蜂の死骸を見た時に感じた静謐感は、結果としての死しか見ていなかったからなのだ……。

そして、たまたまいもりを見つけ、驚かすつもりで主人公は石を投げる。しかし、石はいもりに命中し、いもりはあっけなく死んだ。このとき主人公は述べる。「自分は偶然に死ななかった。いもりは偶然に死んだ。」ここには「偶然」という言葉で自己を正当化する主人公のあざとさが見えてくるのではないか。石がいもりに当たったのは「偶然」かもしれない。しかし、主人公が石を投げた行為そのものは決して「偶然」ではなかった。小動物の立場からすれば、鼠に向かって石を投げた人間たちも、いもりに投石をした主人公も大きな違いはない。「驚かして水へ入れよう」という主人公の説明はなんの慰めにもならないのである。

主人公はこの事件を通じて生と死が両極でないことを痛感した。彼は城崎温泉を訪れた際、三週間以上―我慢出来たら五週間位居たいものだ」と考えていた。しかし、彼は結局三週間でここを離れる。つまり、彼はここにこれ以上滞在することに「我慢」できなかったのである。ここで養生をしていても、生と死が偶然的要素によって左右されるものならば、それは主人公の心を落ち着かせることにはならない。

この作品の結末は、「それから、もう三年以上になる。自分は脊椎カリエスになるだけは助かった。」である。脊椎カリエスの不安だけはなくなった。だが、他の要因でいつ死が訪れるとも限らない。生と死が両極でないことを知ってしまった主人公は、もはや手放しで喜べない状況の中にいる。

9. 谷崎潤一郎 『痴人の愛』　2006年1月

『源氏物語』には、主人公光源氏が少女の若紫を見つけ、あらぬことか彼女を自分の家に引き取り、彼女を理想の女性に育て上げていこうとする有名な話がある。谷崎潤一郎は『源氏物語』の現代語訳を試みたほど、この物語を知り尽くした人物であった。しかし彼は『源氏物語』を痛烈に批判できる人物でもあったことを忘れてはならないだろう。

河合譲治は、カフェで少女ナオミと出会う。職場では「君子」と揶揄されていた彼にとって、せいぜい彼女くらいしか相手にできる女性はいなかったということだ。譲治は彼女を家に引き取り、彼女を養育しようとする。

彼には一つの誤算があった。それは教える側と教えられる側との関係は決して一方通行ではありえないということである。ましてや二人が一つ屋根の下で住むようになれば、その関わりはよけい相互主体的にならざるを得ない。しかも、ナオミは決して素性のいい女性ではなかった。理想の生徒になりえない彼女が、成長にしたがって肉体だけは妖艶さを発揮していき、やがて彼を翻弄してしまうであろうことまでは、庇護者たる譲治にも想像ができなかったのである。そもそも相手を理想どおりに養育するということ自体が男の側の幻想でしかない。

ナオミは本能的に自分の武器を自覚した女性であった。彼女はその娼婦性に磨きをかけ、譲治を欺いてはよその男たちと奔放な生活を送る。事実を譲治に問い質されてもしらを切るしたたかさが彼女にはあった。 このような彼女にさせてしまった責任の一半は譲治にもある。彼はナオミに「どんなものでも買ってやる」、すなわち彼女に対してはお金を惜しまないことを約束した。恋愛中の男の発言の迂闊さが招いた結果であった。

ナオミは千束町の出身である。決して育ちは良くない。もともと実家を飛び出し、自由奔放に生きたいと思っていた彼女にとって、自分を引き取って育ててくれるという譲治は実に好都合な人間だった。ナオミは譲治をうまく利用したのである。

ついに我慢がならず、ナオミを家から追い出したはずの譲治だったが、それもやがて経済的な支えを必要とする彼女の術中にはまってしまい、彼は彼女の肢体の前で拝跪を余儀なくされる。その点で譲治は「情けない男」そのものである。

譲治は結末で、「これを読んで馬鹿々々しいと思う人は笑ってください」と言う。しかし、本当に笑える読者はいるのだろうか。我々はここに作者谷崎の巧妙な仕掛けがあることを忘れてはならないだろう。

10. 太宰治　『津軽』　2006年2月

おそらく数ある作家の中で、太宰治ほど読者によって毀誉褒貶の差が激しい人物はいないであろう。太宰文学に心酔する人間はそれこそ主人公に自分を重ね、我こそは彼の最大の理解者であることを自認するし、その一方で彼の文学に極端な拒否反応を示す人間は彼の生きざまそのものを否定しようとさえする。

その中にあって、安定した人気のあるのが『津軽』である。何よりも語りがのびやかであり、独特のユーモア感覚が生かされている。

「新風土記叢書」の一冊として執筆を依頼された太宰は、津軽旅行記としての体裁を考えた。その様子は珍道中といった趣さえある。太宰を愛する地元の人に「疾風怒濤の接待」を受けたり、途中で買った立派な鯛を旅館に持ち込んで余計な説明をしたら味も素っ気もないただの切り身が出され落胆させられたりするなど、その種の話は枚挙にいとまがない。しかし、作者がのびやかなのは飽くまでも故郷の金木町以外の土地を訪れている時であり、地元の長兄たちの前では気疲れがすることを彼は告白しないではいられなかった。

作者は、結末で越野たけとの再会場面を描いていた。かつての育ての親だった彼女と30年ぶりの再会を果たすべく、小泊村を訪れる場面は作品の白眉とも言える。再会が実現したものの、その嬉しさが言葉とならず二人で黙って運動会を眺めているばかりのシーンは有名だ。このとき、作者はすっかり安心しきっている。先年亡くなったばかりの実母は、このような安堵感を自分に与えてくれなかった、と彼は言う。

しかし、この言葉を素直に受け取っていいものだろうか。作品中では、実にさりげなく自分のことを「母親ゆずりの苦労性」と表現している箇所があった。ここは文脈から言ってあえて「母親ゆずり」という言葉を添える必然性はない。作品全体を通し、読者は育ての親に対する作者の限りない愛情を確信する。そのことをより効果的に伝えるためには、実母に対する思いを表現のうえで抑制する必要が作者にはあったのではないか。実家を訪れて気疲れがする作者はまさに「苦労性」そのものである。それは彼の一生を左右する根本的な性格でもあった。それを「母親ゆずり」と書くことで、彼は実母との一体感を確かに作品の中に刻印したのである。

作品は昭和19年に書かれた。戦争のさなかであるにもかかわらず、作品はあくまでも明るく、暗さは微塵も感じられない。

11. 石坂洋次郎 『青い山脈』　2006年3月

往年のベストセラー作家、石坂洋次郎の作品が読まれなくなって久しい。かつては本屋の書棚を埋め尽くしていたものだが、今ではそれが懐かしい。『青い山脈』も、せいぜいその映画主題歌がしばしば思い出のメロディーとして歌われることで記憶に残っている人が多いのではないか。

この作品が発表されたのは昭和22年。女学校で起きたにせラブレター事件を解決しようと動いた女性教師島崎雪子は、まさに戦後民主主義の申し子といった存在である。

彼女は、この事件の背後に女学生たちの野卑な精神を嗅ぎ取り、それを教室での問題として糾弾しようとした。教室で首謀者を特定し、その非を諭すというのは彼女の論理からすれば「間違いのない」やり方であったはずだ。ましてや、首謀者が自分の行為を「学校のため」と言い逃れしたのであれば、雪子にとってこれは看過できない事柄だったのである。

この事件を教室で問題として取り上げようとしたとき、これに反対したのは校医の沼田であった。この環境で暮らす女学生たちの背景を踏まえない、直接的な方法は反感を招くばかりであることを、彼は土地の人間として十分すぎるほど知っていたのである。

『青い山脈』は戦後まもない時代の中、民主主義を謳歌した作品として受け取られがちだが、事情はそう単純ではない。作者は戦前『若い人』を発表した際、右翼団体から不敬罪の被疑者として睨まれ、一時期沈黙を余儀なくされた経験がある。彼はむしろ多くの人々が「民主主義万歳」を叫ぶ当時の風潮に違和感を覚え、読者に警鐘を鳴らそうとしていたフシがうかがえる。それは、作品中の女学生が実に安易な形で「民主主義」を唱え、その言葉が一人歩きして島崎雪子の進退問題にまで発展していった経緯からも明らかだ。あるいは、寺崎新子が家の窮乏を救うべく、リンゴの密移出を企てる場面が描かれているのも、日本版の『桜の園』とも言える太宰治の『斜陽』とは明らかに対極的な生き方が志向されている。人間はとりあえず生きなくてはならない。欲望や嫉妬、あるいは競争心をもった個人が混乱した時代状況の中でいかにして他者と共存し、本当の意味での民主主義国家を築いていけるのか。作者はそのことを問いかけている。

『青い山脈』は、ヒロイン島崎雪子がこの土地の風土を理解していく物語でもある。その点で彼女がこの土地の人間である沼田のプロポーズを受け入れるのは、いかにもこの作品の結末にふさわしい。

しかし、当時の読者はこの作品をどの程度まで理解しえていたのであろうか。この作品が空前の大ブームとなったことが、長い目で見ると逆に不幸だったと言えるかもしれないのだ。

12. 梅崎春生 『桜島』　2006年4月

いかにして死ぬか。これは人間誰もが避けて通れない問題である。梅崎春生の『桜島』では、昭和20年7月に桜島への転勤を命ぜられた兵曹「私」の視点に寄り添いながらこの問題が追求されている。

沖縄は既に玉砕し、大和の出撃も失敗に終わった。あとはいつ米軍が本土に上陸してくるかという状況の中、桜島への転勤は迫り来る死の宿命を受け入れることに他ならなかった。「美しく死にたい」と「私」は思う。しかし、それは感傷にすぎないと谷中尉や吉良兵曹長は否定する。彼らは彼らなりに戦争の現実に触れ、死を観念的に語ることの空しさを痛感していた。

「私」は決して死の宿命を納得して受け入れているわけではない。それは、彼が「歯ぎしりするような気持で、私は遊び呆（ほう）けた」と述べていることからも明らかである。事実、桜島転勤が決まったとき、「私」は一人痛飲している。逃れられない宿命を自分なりに納得させるための方便が「美しく死にたい」という願望だったのだ。

この作品は、「美しく死ぬ」という命題をめぐる主人公と登場人物たちとの対話に他ならない。桜島へ出発する前夜、訪れた妓楼で「どうやって死ぬの」と生真面目な表情で尋ねてきた右耳のない妓（おんな）の言葉がその後も幾度となく「私」の脳裏をかすめる。また、見張兵も「滅亡の美しさ」について語っていた。しかし、その彼も後に米軍の空襲に遭って落命する。その死貌（しにがお）は人間のあらゆる秘密を解き得て死んでいった者の貌（かお）ではなかったと「私」は述べている。つくつく法師を捕らえて握り潰した「私」の行為は、つくつく法師が鳴くと良くないことが起こると語っていた見張兵への哀悼の気持ちの発露だったのか。それとも、見張兵に代わっての復讐行為であったのか。はたまた、逃れられぬ死の宿命を目の当たりにした「私」のぎりぎりの抵抗であったのか。 偏執的なまでの凶暴性を帯びた吉良兵曹長は、本土決戦になったら竹槍で戦い、卑怯な振る舞いをする味方には軍刀で斬りつけるとまで豪語した。「私」はその姿に言い知れぬ悲しみを感じざるをえない。

そこへもたらされたのが、終戦の詔勅であった。「私」の体内には異常な戦慄が駆け巡る。そして、吉良兵曹長の目から涙の玉が落ちたのを「私」は見逃さない。

暗号室へ向かう道の途中で「私」が目にしたのは落日に染められた桜島岳である。「私」はこれを「天上の美しさ」と形容している。この時拭っても拭っても溢れ出る涙を流しながら坂道を下りていく「私」に去来した思いとはいったい何であったのだろう。

13. 三島由紀夫 『仮面の告白』　2006年5月

『仮面の告白』が三島由紀夫によって起稿されたのは、太宰治が亡くなって半年も経過していない頃であった。三島の太宰嫌いはつとに有名だが、『仮面の告白』は太宰の代表作『人間失格』との共通点があまりにも多い。両者はともに周囲からの隔絶感に悩み、なんとか自己を打ち立てようとする主人公が描かれている。三島の中には太宰に対する近親憎悪的な感情が渦巻いていた。『仮面の告白』は言ってみれば三島版の『人間失格』である。

「私」は生後まもなくして、溺愛する祖母のもとで育てられる。母親とのつながりを断たれたところに彼の幼児体験の特異性がある。遊び相手が女の子と限定されたことが、逆に同性たる男性に惹かれる性向を生み出したのかもしれない。しかし、そのことは他人には秘められる必要がある。そのため「私」は普通の＜男＞を演じることを余儀なくされる。『仮面の告白』という逆説的なタイトルが生まれる所以がここにある。

その「私」が唯一こだわった女性が一人いた。それが友人の妹園子である。

「私」が彼女に初めて出会ったとき、その美しさに感動しながらも悔恨を覚えたという告白は極めて象徴的だ。このとき、「私」は自分が彼女の前で本当の男としては向き合えない宿命を咄嗟の内に感じ取ってしまったのである。「私」が演じたのは彼女を恋する＜男＞の役。その演技には彼なりの必死な思いが込められていた。

一方、園子は「私」のそのような思いを知る由もない。彼女はごく普通の女性として「私」を恋し、ラブレターも書く。しかし、それを受け取った「私」は嫉妬に駆られる。なぜなら、彼女が思いを寄せているのは実際の「私」ではなく、偽装された「私」だったからである。「私」は生身の「私」と理想化された「私」との間で呻吟していた。

結局この二人は結ばれることはない。一度縁談をほのめかされながらも、「私」がそれをうべなうことがなかったからである。だが、なぜ二人が結ばれなかったのか、別の男性と結婚した今でも、彼女はその疑問を抱きつつ生活している。もはや人妻となった彼女となおも逢い引きを重ねようとする「私」の行為にはただならぬものが感じられる。そこには、自分は本当に女性を（むしろ園子だけでも、と言うべきであろうか）愛することができないのか、という自らの存在そのものに対する根本的問いかけが込められていたのだ。

逢い引きをすることに良心の呵責を感じて「怖い」と漏らす園子と、彼女に向き合いながらも近くにいる若い男性に目を奪われてしまう「私」との隔たりはあまりにも大きい。

14. 野間宏 『顔の中の赤い月』　　2006年6月

人間にとって過去とは如何なる意味を持つものだろうか。

北山年夫には癒しがたい過去があった。

一つは、彼が偽りの愛の罪を自覚したこと。失った恋人を忘れようとして、北山は一人の女と関わる。相手は彼のそのような心を知りながらも健気だった。彼女は北山が戦地に赴いている間に短い命を終えている。彼女を失った今、そのかけがえのなさを彼は痛切に感じている。

もう一つは、戦地において疲労と飢えで歩けなくなった戦友を見捨ててしまったこと。彼もまた同じ状況に置かれていたのであるから、このことで彼自身が非難される謂れはないはずである。しかし、彼は戦友の最期の姿が目に焼きついて離れない。

北山は過去に囚われて生きている。彼が堀川倉子に惹かれたのも、彼女が絶えず苦しげな表情を浮かべているからであった。

倉子は戦争未亡人である。夫との思い出は彼女にとってかけがえのないものであり、彼女自身、「ほんとうに幸福だった」と述べている。彼女は夫との思い出に縋ることでようやく自分を支えていたのかもしれない。

ここには過去に縛られた男と女がいる。この二人が互いに惹かれ合い、逢瀬を重ねながらも接近するどころか却ってよそよそしくなってしまうのは、読者にとってもどかしくさえあるだろう。

それでも、倉子は作品の最後において、北山と新しい関係に踏み出そうと意を決したようだった。事実、北山は彼女の姿の中から「誘いの空気」が流れ出ているのを感じる。それでも、北山は相変わらず自分の過去に囚われたままだ。

それぞれが癒しがたい傷を負っているのなら、それを互いに分かち合うこともできたはずである。しかし、北山にはそれができない。彼が今こだわっているのは贖罪をする自身の姿であり、これを守るには倉子とそれを分かち合って新たな愛を獲得することは許されないのであった。彼の目は完全に過去へと向けられている。 倉子の顔に赤い大きな月が上ってくるのを北山は見る。いつか戦場で戦友を見捨てたときに彼が目にしたのがこの赤い月であった。この月は北山に、自分が「他の人間の生存を見殺しにする人間」であることを痛感させる。今の彼にとって、この月は彼の愛の発露に歯止めをかけるものでしかない。

戦争の影を引き摺った登場人物たちが描かれているという点では、これは紛れもなく戦後文学であった。北山の混迷の深さが、戦争の傷跡を殊更印象づけている。

15. 川端康成 『雪国』 2006年7月

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」この一文で『雪国』は書き始められている。

この冒頭は極めて象徴的だ。このトンネルを境として島村は「日常」から「非日常」の世界へと運ばれていく。彼の東京での日常生活を我々読者はほとんど窺い知ることができない。ただ、時折文筆をしていることは分かるのだが、親譲りの財産もあり、「無為徒食」の男として彼は設定されている。その彼にとって、トンネルの向こうの雪国で駒子と年に一度会うことは、ある意味で癒しの効果があったのだろう。

彼は当初から駒子にある種の清潔感を感じている。それが「いい友達でいよう」という島村の言葉を誘発させた。しかし、この言葉が逆に足枷(あしかせ)となって駒子は懊悩する。そしてその一線を越えたとき、駒子にとって島村は愛しい対象となった。たまにしか訪れない島村を待ち受ける彼女の態度には初々しささえ感じられる。しかし、それに応える島村はあらゆるものに「徒労」を感じる男であり、また責任を自ら引き受けない人間であった。それでいながら、再会した駒子に、「こいつが一番よく君を覚えていたよ。」と人差し指だけ伸ばした左手の握り拳を目の前に突きつける男でもある。島村のそのようないい加減さが却って駒子の純粋さを際立たせる役割を果たしてもいる。

噂では、駒子は師匠の息子である行男と婚約していたという。それは行男への愛情からというよりも、二人の結婚を期待する師匠とのしがらみによるものだったらしい。行男が東京で長患いをしたため、駒子は芸者に出て病院の金を送った、と周囲では取り沙汰されている。

作品の冒頭、列車の中で島村が目にしたのは、病の進行した行男とそれを介護する葉子の姿であった。島村は、葉子の真剣な眼差しに心惹かれる。葉子がなぜ行男の面倒を献身的に見ているのか、作品を読む限りよく分からない。行男が危篤状態に陥ったとき駒子を呼びに来た葉子を、駒子は追い返そうとする。彼女は島村の前で行男と許婚(いいなずけ)であったという噂も否定する。更に、行男の死後も墓参りを彼女はしようとしない。駒子はある覚悟をもって、過去と訣別しようとしているのである。

駒子と葉子との間にも、愛憎入り乱れた確執が横たわってもいる。その真相はよく分からない。いずれにせよ、それは彼女たちがそれぞれ今を真剣に生きようとするためであるようだ。この二人の女性に心惹かれる島村は、いわば責任のない立場で二人を眺めているに過ぎない。その曖昧な自分の姿を突きつけられるのが、作品結末の火事の場面である。

上から落ちてきたのは葉子だった。「この子、気がちがうわ。気がちがうわ。」と叫ぶ駒子。彼女に近づこうとして島村は葉子を駒子から抱き取ろうとする男たちに押されてよろめく。肝心のときに彼女を助けることもできない、傍観者でしかありえなかった島村の姿がここでは象徴的に描かれている。

16. 中野重治 『五勺の酒』 2006年8月

昭和22年に発表された『五勺の酒』は、中野重治という作家を考えるうえで貴重な作品と言えよう。

主人公「僕」は中学校校長。酒に酔った状態の中で、最近の風潮に対して批判をするというスタイルがとられている。ほろ酔いの中で愚痴を言っているという感じだ。

「僕」の批判の矛先は共産党へ向けられる。天皇制が天皇という個人を犠牲にして成り立っていることを意に介さない彼らの批判の仕方に「僕」は苛立ちを隠しきれない。すべてをレッテル貼りの次元で解決し、それ以上は洞察しようとしない共産党の姿勢に「僕」は違和感を覚えるのである。「僕」は「中学生が賢くなった」とも述べる。これも決して褒め言葉ではない。大人たちの行動を表面的に模倣する彼らに「僕」はやりきれなさを感じている。ブームとして民主主義的な雰囲気を謳歌しようとする気分、さらにはそれに便乗しようとする軽薄な人々に対して「僕」は感覚的な疎外感を感じているのだ。

敗戦は共産党にとって、解放であった。治安維持法がなくなり、思想犯は釈放された。しかし、これで本当の「自由」が獲得できたわけではない。我々はついつい束縛状態から解放されたことを「自由」と思いがちだが、真の「自由」は絶えず自由を求め続ける行為そのものの中にある。

虐殺された人をかつぐ一方で、「メカケ」を蔑視する。その蔑視は天皇個人への蔑視と表裏の関係にある。彼らは既成の「天皇」「メカケ」のイメージだけで論じるだけであり、ここからは本質的な批判は望めそうもない。「僕」の苛立ちは単に共産党だけの問題ではなく、組織における人間の在り方そのものが問いかけられていると言ってよいだろう。

この作品が書かれたとき、中野は共産党員であった。党を絶対視するのではなく、批判すべきところはしっかり批判できなければ閉塞状態に陥ることは目に見えている。外部から批判をするのではなく、その内部にあってこの組織が抱えている危うさを浮き彫りにしたいという思いが彼には強くあった。

教育勅語の廃止、そして教科書の墨塗りに象徴されるように、敗戦後の我が国の教育現場は大きな転換を余儀なくされた。価値観が180度転換する中で、生徒のみならず教師もその荒波に揉まれ、動揺せざるをえなかったのである。「僕」はそのような教育現場の人間として、率直な感想を述べている。

『村の家』で転向小説を書き、その中で挫折感に打ちひしがれ意気消沈するのではなく、いかなる状況にあっても次なる目標を見据えている主人公の姿を描いた作者は、実生活においても明晰な実行者だったと言えよう。

17．石川淳『焼跡のイエス』 2006年9月

終戦直後、混乱期の上野のガード下を舞台にして、生きるために盗み行為をする少年の姿に一瞬イエス・キリストの面影を「わたし」が垣間見る物語、それが石川淳の『焼跡のイエス』である。

時は昭和21年7月の晦日（みそか）。終戦からほぼ一年が経過しようとしている。街頭ではさまざまな商いが行われ、市場閉鎖の官のおふれがたびたび出されるものの、それは何ら効力を持たない。

そのような中、白米のおにぎりを売る若い女を「わたし」は目にする。「わたし」が惹きつけられたのはおにぎりではなく、その肉感的な雰囲気を発散させている女そのものであった。そこに現われるのが不潔さと悪臭を漂わせた一人の少年である。彼はそこにあったおにぎりに食いついたばかりでなく、その女の足のうえに抱きついた。それを振りほどこうとする女と、なかなか離れようとしない少年は揉み合ったまま、「わたし」の方へぶつかってきた。

そのとき、「わたし」が瞬時の判断で汚れた少年ではなく、女の方に抱きついたのは無理もなかったと言ってよい。ただ、このとき女に「わたし」が睨まれたのは、ほんの一瞬でも「わたし」の脳裏をかすめた甘美な思いを彼女が察知したからであろう。

この少年はあとで「わたし」の抱えた風呂敷包みをも奪おうとして襲い掛かってくる。そのとき「わたし」が彼の中に見出したのは苦患（くげん）にみちたナザレのイエスの生きた顔であった。「わたし」からコッペパンと財布を盗んだ少年だが、その行為そのものが彼にとってやむにやまれぬ行為であったと「わたし」は解釈しているのである。 この少年は当時の世の中のカオス（混沌）そのものを体現する象徴的な人物であった。「わたし」が彼にイエスを見たのも、そのような時代背景があったからである。

その翌日、市場は完全に閉鎖された。はじめて官のおふれが効力を発したのである。そのことは世の中が秩序を持ち始めたということであり、それはとりもなおさずカオスとしての少年も今後は現われないということを意味していた。「わたし」に残ったのは、少年が噛みついた手足の傷だけである。「わたし」にはあのとき垣間見たイエスの姿そのものが「夢の中の異象」としてだけ記憶されている。

8月1日を境として、上野のガード下にも秩序がもたらされた。戦後日本の復興はこれから本格的に始まろうとしている。

18. 坂口安吾『白痴』　2006年10月

坂口安吾は戦後まもなく「堕落論」という注目すべき評論を発表している。人間は堕ちるところまで堕ちていかないと真の現実の姿を捉えることはできないし、そこからしか人間の本当の意味での再生はありえない。安易なヒューマニズムや民主主義万歳の浮薄な風潮に対して明確な一線を画そうとするこの姿勢は、ある意味において安吾の本質を如実に表していると言えよう。

『白痴』は安吾にとって、いわば「堕落論」の小説版であった。

27歳の文化映画演出家であった伊沢は、その住む環境からして性的放縦のただ中にいる。彼と同じ家を借りている娘は町会長と仕立屋を除いた他の町会役員（10数人）と公平に関係を結び、そのうちの一人の子供を宿していたし、近所では兄妹が夫婦関係を結んでしまったにもかかわらず、その母親はその事実を黙認していた。やがて兄のほうに女ができ、妹の方を片付けなければならないと画策していく中で当の妹が自殺する、といった具合だ。そのような環境の中で生活する伊沢自身、この戦時下において自らの仕事に生き甲斐を見出せていない。

その彼の部屋に、隣人の女房が突然転がり込む。彼女は美しい顔立ちながら、白痴だった。周囲の者に知られたら何を言われるか分からない中、彼はこの女を匿うことになる。会話がなかなか成立しない二人にあって、唯一関わり合えるのは身体の関係だけであった。

空襲に襲われ、群集から離れて逃げ延びようとするとき、彼は女の手を力いっぱい握ってひっぱり、「死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。（略）この道をただまっすぐ見つめて、俺の肩にすがりついてくるがいい。分ったね」と言う。頷くその姿は、「女が表わした始めての意志」であり「ただ一度の答え」であった。そのいじらしさに伊沢は逆上しそうになる。

しかし、その感情も長くは続かない。逃げ延びて眠りこけている女の鼾声は豚の鳴き声に似ているように彼には感じられる。彼の目の前にあるのはただ肉の行為に耽るだけの肉塊にしかすぎない。女の寝ているうちに立ち去ろうかとも彼は思う。しかし、今の彼にはこの女を捨てる張り合いも潔癖もない。かといって愛情があるわけでもない。女を捨ててみても明日の希望があるわけでもなく、やがて米軍が上陸してあらゆる破壊が行われるだろう。考えることすらが彼には億劫だったのだ。

伊沢が辿り着いた境地、それは決して深遠なものではない。自分に取り憑いた運命は決して逃れられるものではなく、これを引き受けていくしかないということ。行くところまで行かねばならない。これはあきらめなのか、それとも決意なのだろうか。

19. 大岡昇平『野火』 2006年11月

『野火』は単なる戦争文学の域に止まらない、普遍的な広がりを持った文学と言えよう。我が国にも戦争を扱った文学は数多くある。しかし、それらは例えば原爆の悲惨さを扱った『黒い雨』(井伏鱒二)であったり、戦時下における庶民の姿を描いた『二十四の瞳』(壺井栄)であったりした。

『野火』がこれらの文学と決定的に違うのは、主人公が一兵士として比島へ赴き、現地の女性を射殺したり、飢えのなかで人肉食を行ったりした当事者であるということである。すなわち、作者は戦争を加害者の視点から描き、そのような行動をしてしまう人間そのものを問いかけているのだ。そのような描き方を自虐的と捉えるのは適切ではない。

「私」は作品の冒頭で、病気のため隊から離れることを命じられた男である。与えられたのはわずかな食糧と一個の手榴弾のみ。「私」はいわば隊から「見捨てられた男」であった。飢えと戦いながらジャングルをさまよう「私」。人家があれば略奪も辞さない。そのような中で自分を見つけた現地女性を「私」は射殺した。「私」はこの事実を「偶然」という言葉で片付けようとする。しかし、「私」の悲しみは禁じ得ない。「私」はすべてはこの銃のせいだとも言い聞かせる。だが、後にこの銃すらも捨てた。ここには「私」なりの意志的選択が見られるし、偶然性や銃に責任を押し付けていた自らの姿勢を決定的に変えたと考えられる。

あるいは、死んだ仲間の肉を食べたいという気持が湧き起こり、右手が伸びる場面がある。この仲間は死ぬ間際、その行為を認める発言すらしていた。だが、このとき自分の左手が右手を抑えた。なぜかは本人も分からない。しかし、この時のことを「私」は何度も思い返し、考え続けるのだ。

その「私」も、後に動けなくなったとき、同じ日本人兵士の永松から差し出された「猿の肉」を口に入れた。それがおそらく人肉であることにうすうす気づいていながらも……。

人間とは認識する動物である。それが人肉であると認めてしまえば口に入れることはできないが、そうでなければ受け入れることができるのである。

作品全体を通じて印象的なのは、「私」自身が曖昧な結論でごまかすことを自ら禁じる、徹底的な自己追求の精神の持ち主であること。最後、永松に人道的な怒りを覚えた「私」が引き金を引き、その後精神に異常をきたしてしまったのも、「私」の中になんとか「人間」であろうとする心があったからだ。「人間」を「人間」たらしめているものは何なのか。『野火』はそのことを我々に問いかけている。

20. 遠藤周作『海と毒薬』　2006年12月

だれもが死んでいく中で、俺がたった一つ死なすまいとしたものがあの「おばはん」だったのだ、と勝呂が回想する場面がある。彼にとってはじめての患者であり、彼女に何かと世話をやくことが、当時の彼にとって自分を支える唯一の拠り所だったのかもしれない。

その彼も、米軍捕虜生体解剖の場に立ち会ってしまった。彼が他の登場人物たちと比べ、人間的感情を持ち合わせていること、解剖の場では動転してしまって何の役にも立たなかったことをいくら弁明したとしても、彼がその事件の当事者であるという事実の前ではそれらは何の慰めにもならないのである。戸田が言うように、勝呂は断ろうと思えば断れる機会がいくらでもあった。しかし、それができず流されてしまったところに、この人物を造型した作者の意図を読むべきだろう。勝呂は決して特別な人間ではない。我々と全く変わりのない、ごく普通の人間なのである。

では、他の人々は特別な人間だったのだろうか。

おやじさんこと、橋本教授は次期医学部長と目されている人物だった。しかし、その彼は部長の親類である田部夫人の手術を執刀し、そこで彼女を死なせてしまう。それは比較的安全な手術であった。失態を演じてしまった彼にとって、軍からの依頼を受け入れることは何とか医学部内での自らの立場を守るためには必要だったのである。彼には博愛精神そのもの（それは時には押し付けがましさもあったが）とも言うべきヒルダ夫人がいた。彼女は夫のそのような行為を知る由もない。その皮肉な構図がこの作品では浮き彫りにされる。

戸田にしても、幼い頃から優等生であり続け、大人の気に入るにはどうすべきかを本能的に熟知していた。彼にはまず、他人の目ありきであり、自己そのものは空虚であったと言わざるを得ない。彼は、自分に果たして良心の呵責があるかと絶えず問い続けている。戦争の中、次から次へと人が亡くなっていく。彼はそれを仕方のないことと受け止め、どうせ戦争で失われる命であるなら、やがて死ぬべき患者を後世のために役立てる方がはるかにいいと考える人間である。確かに彼の考え方はある意味で正しいのであろう。しかし、彼は何に対しても無感覚になっていく自分に底知れぬ恐怖をひそかに感じていたのではないか。だとすれば、彼にとってこの生体解剖実験に立ち会うことは、自分に良心が不在かどうかを検証する機会だったのかもしれない。

第三者から見れば狂気にしか思われない事件の当事者の内面に奥深く入り込み、遠藤はその内実を浮き彫りにしていった。そこに描かれる人々は決して我々とかけ離れた人間ではない。彼の人間洞察はその後も『沈黙』『侍』『深い河』といった作品の中で展開されて行く。

21. 開高健　『裸の王様』 2007年1月

『裸の王様』は一見すると、継母に厳しく育てられるあまり個性を抹殺されていた子供が、画塾の先生である「ぼく」との出会いによって心を解放し、生き生きとした絵を描けるようになる経緯を語った物語と捉えることができる。そこには現代の教育に対する批判意識も込められていると言うことは可能だろう。また、太郎の父親である大田氏をはじめとする大人たちは結局のところ子供の心を理解しようとはせず、彼らが催した絵画コンクールも利己的な意味合いが非常に強かった。

しかし、このような言い方は語り手である「ぼく」の立場に沿ったものであり、ある種の偏向を免れていない。確かに「ぼく」は若い大田夫人が後妻であり、周囲から後ろ指をさされることのないよう太郎をしっかりしつけるべく、彼女なりに必死であったことを見抜いていた。その一方で太郎の抑圧された心を察知し、生き生きとした絵を描けるようにした「ぼく」の功績は確かに評価に値する。

アンデルセンの童話を「王様」や「宮殿」といった装飾物を抜き去って「ぼく」が語ったところ、太郎が描いたのはフンドシ姿の大名の絵だった。ある意味でこれは物語の本質、すなわち権力者の虚栄と愚劣を暴いている。これを大田氏の息子の作品とも知らず、「農村か漁村の子だろう……」「アンデルセンほど国際的な作家をこんな地方主義で理解させるなんて」としか言えない審査員の一人山口の言葉はあまりにも虚しい。山口はアンデルセンを知識として知っているかどうかを絵画の評価基準にしていたに過ぎないのである。したがって裸の王様の絵は評価するものの、フンドシ姿の大名の絵は彼にとって取るに値しない。コンクールにおける審査のあり方そのものがここで問われているのだ。

『裸の王様』を読んで気づかされるのは、「ぼく」の哄笑で作品が閉じられていることだ。「ぼく」は大田氏や山口をはじめ主催者や審査員たちの俗物性を暴き、溜飲を下げたに違いない。当惑する彼らを目の当たりにして「ぼく」が心の中で快哉（かいさい）を叫んだであろうことは容易に頷ける。しかし、見方を変えれば「ぼく」はこのことのために太郎の絵を利用したと言えるのではないか。自分は太郎の側にいるという思いがあのような行動を生み出したとすれば、それは思い違いも甚だしい。「ぼく」はコンクールに絵を出してほしいと太郎に頼まれたわけでもない。彼の与り知らないところで動いているに過ぎないのである。

タイトルの「裸の王様」は、コンクールの題材であると共に、大田氏や山口、さらには結末で哄笑する「ぼく」自身をも表している。ここに作者の批評意識を読むべきなのではないか。

22. 庄司薫　『赤頭巾ちゃん気をつけて』2007年2月

庄司薫の「薫くんシリーズ」は、昭和40年代半ばから50年代にかけて、当時の若者たちにとって定番的な意味合いをもった作品であった。そのさきがけとなった『赤頭巾ちゃん気をつけて』は、学生運動はなやかなりし頃、東大入試中止を契機に浪人を決めた日比谷高校（ここは当時の東大合格者トップを誇る超有名校だった）出身の薫くんの饒舌な語りが特徴的である。

学生運動そのものが昔日のものとなった今改めてこの作品を読み返してみると、薫くんの確かな地歩が浮き彫りになってくる。彼は決して学生運動には加担しない。それは怖いからではなく、運動に明け暮れる学生達が自ら「動いている」のではなく「動かされている」ことを知っているからである。また、彼が東大にこだわるのは、そこで学びたいと思わせてくれた先生とじかに接する機会があったからであり、盲目的な東大病のゆえではない。知らない人から見れば、彼は「日和見主義者」であり「受験競争に勝ち抜くエリート候補」ということになりかねないが、そのような紋切り型のレッテルこそが空疎なものでしかない。

彼が誠実に求めようとしていたもの、それは受け売りや借物ではない、自分の態度や言葉であった。ある日、彼は街の本屋へ入った途端「吐き気のような不快感」に襲われる。これは、彼が街を歩いていて見かけたヘルメット学生たちに感じた「苛らだたしい反撥」と通底し合うものだろう。そのとき、彼は偶然幼い女の子と出会い、癒される。彼女が探し求めていた本が『赤頭巾ちゃん』だった。彼女のためにもっともふさわしい本を探してあげる薫くん。立ち去っていく彼女に「気をつけて」と彼が叫ぶと、女の子も振り返り「あなたも気をつけて」と言ったように彼には聞こえた。このときの交流に彼は発見をしたのである。大言壮語して社会変革を叫ばなくても、身近にいるいとおしい存在を守れる男になることが大切であることを。彼が絶交状態にあった幼なじみの由美に会いに行くのはその決心の表れである。

『赤頭巾ちゃん気をつけて』は、東大入試中止を一つのきっかけとして＜自分探し＞をする若者の姿を描いている。彼が得た結論はささやかなものかもしれないが、それ自体は彼の実感に根差した実質あるものなのだ。

23. 大江健三郎　『飼育』 2007年3月

戦争末期、飛行機が墜落し、村人の捕虜となった黒人兵。県からの指令がないまま、村では厄介者の面倒を見なければならなくなる。このとき、黒人兵を「飼う」と言い放った父親の言葉に「僕」は興奮を抑えきれない。

この村じたいが町の人々からは蔑まれていたことは、作品の随所から伺える。村人たちは「汚い動物のように」嫌がられていた。蔑視を痛みとして感じる感性は「僕」の心にも確実に存在していた。

黒人兵は「獲物」として村人たちに飼育される。最初は異物であった黒人兵だが、彼に興味を示す子供たちの接近が功を奏し、彼らの間には一種のユートピア空間が形成されていく。黒人兵と子供たちが一緒に水浴びをする場面はまさに至福の頂点であった。

しかし、この状態は黒人兵を県に引き渡すよう村に通達があってから急変する。異変を察知した黒人兵は「僕」を人質にして抵抗を始めた。捕虜体験をしたという点で黒人兵と「僕」は通い合うものがある。

個人と個人との関係は、その背景や状況によって刻々と変化する。「僕」と黒人兵との場合も例外ではない。家畜であったはずの相手が一気に恐怖の対象へと変貌する。

「僕」にとっての衝撃的な体験はこればかりではない。もともと「僕」にとって、父親はまさに尊敬の対象であった。鼬（いたち）の皮を剥ぐ作業は、町の人々が忌み嫌うものであったが、「僕」は父親のその技術に誇りさえ抱いていた。ところが、その父親は彼らに近づき、鉈（なた）を振り下ろす。膠着状態を一挙に打開しようとしたのは分かる。しかし、この時の父親の表情に「僕」が恐怖を覚えたであろうことは容易に想像がつく。この一撃で黒人兵は頭蓋を打ち砕かれて死んだ。と同時に「僕」の左手も粉砕されたのだ。

これ以来、「僕」には大人たちが「怪物」にしか映らない。そして「僕はもう子供ではない」という啓示にも打たれる。子供たちの遊びに加わろうとしない「僕」は、もうかつての無邪気な「僕」ではない。その点で、『飼育』は「僕」の成長物語と言えるだろう。ただし、それは苦い痛みを伴うものであった。かつて黒人兵を「あいつは獣同然だ」と語る父親の言葉に「僕」は興奮した。しかし、現在の「僕」は明らかにこの父親とは違う認識を抱いているはずである。 このあと、作品には描かれていないが日本はまもなく敗戦を迎える。それは日本がアメリカに「飼育」される近未来を暗示してもいるのだ。

24. 柴田翔『されど　われらが日々—』　2007年4月

たまたま古本屋で手に取ったH全集をきっかけに、婚約していた文夫と節子の関係の危うさがしだいに浮き彫りになっていく物語。『されど　われらが日々—』をそう要約することは可能だろう。しかし、作品の眼目は二人の関係に限定されるものではなく、同時代を生きた若者たちの青春群像を描き出すことにあった。

この作品では多くの挫折者が登場する。

佐野のように裏切り者の自覚を拭い去ることができずに自殺した者もいれば、野瀬のように六全協での共産党の方向転換に激しい衝撃を受け自信を喪失したものの、後に大手企業に入ってエリートコースを歩んでいる者もいる。節子は大学生の頃、その野瀬の忠実な生徒であり、本人も知らず知らずのうちに彼を愛していた。しかし、野瀬の挫折は彼女の熱い思いを冷めさせることにもなった。その一方で、当時は「日和見」「小市民的」などと非難を受けながらもそれらに耐え、自分のスタイルを貫いた曽根のような人物もいる。

このような人物と比べると、「私」こと文夫は非政治的人間であったという点で異質な存在であったと言える。自己の中に抱えた空虚感を埋めるための方便がトレーニングとしての受験勉強であり、大学合格後の女性たちとの恋愛とは言い難い関わりであった。このある意味でのいい加減さは優子の自殺によって復讐を受けることになるのだが、彼にとってこれは自らの空虚さを改めて再確認する体験であったと言ってよい。

文夫と節子はいとこ同士であり、二人の婚約も当事者の積極的な意志からではなく、周囲の勧めによるものであった。しかし、最初からこの婚約には馴れ合い的なものがあったのではないか、と疑問を投げかけるようになるのは節子の方である。ささやかな幸福を求めていたという点では文夫も節子も同じである。しかし、自分が相手に要求するばかりであることに節子は気づかされた。気づいていてもそれを決して口に出そうとしなかったのが文夫であったのとは実に対照的である。

節子が文夫との婚約を解消し、東北の田舎で英語教師となるべく旅立っていくのは作品の流れからして必然的な結末であった。自分の空虚を見つめ、そこに自閉するのではなく、過去の自分と訣別する勇気をもつこと。その大切さをこの作品は訴えているし、読後にある種の清涼感が残るのはそのためと思われる。

学生運動は過去のものとなった。しかし、今の自分に納得できず、新たな自分を見つけようと模索する若者は決して少なくない。そのような若者がいる限り、この作品は今後も生き続けるはずである。

25. 深沢七郎『楢山節考』　2007年5月

棄老という重いテーマを扱った作品が『楢山節考』である。

ここでは対照的な二人の老人が登場する。一人は主人公おりん。もう一人は又やん。七十歳を迎えると楢山まいり、すなわち老人が山に棄てられるというのがこの村の慣わしであった。

おりんは六十九歳を迎え、その心の準備を始めている。彼女は村落共同体の論理をいわば内面化し、それを実行に移すことに何の疑問も抱いていない。その日を迎える前に、息子である辰平の後妻を早く決めなくてはならなかったし、楢山まいりを決行する前日、既に山へ供で行った人間たちだけを呼んで振る舞うどぶろく（白萩様）もきちんと用意してあった。そして注目すべきなのは、楢山まいりを決行するのはあくまでも本人の意志なのである。

その一方で又やんは七十歳を迎えても、決行するそぶりがない。挙句の果て、彼は縄で縛られて、倅に谷底へ落とされる羽目になる。

楢山まいりには幾つかの掟があった。山へ行ったら物を言わないこと。家を出るときは誰にも見られないこと。そして運搬する人間は帰る際には後ろを振り向いてはいけないこと。貧しいこの村で人々が生きていくためには、老いたる者が身を引かなくてはならない。それはあたかも自然の摂理であるかのように決行されることが重要だったのである。現代の我々の感覚からすれば、最後まで生に執着した又やんの姿は何ら怪しむに足らない。だが、村の掟にしたがい、それを当然のこととして実行するおりんの姿にはある種の凛々しさが漂う。

いったん母親を置いて山を降りたものの、途中で雪が降り始め（楢山まいりで雪を目にするのは幸運とされていた）、そのことを伝えたくて辰平は引き返す。母親にそのことを伝えても、おりんは無言のまま彼に帰るよう促すだけである。結局、この後脱兎のごとく山を駆け下りた際、彼が目にしたのは必死に倅の襟を摑もうとする又やんと、それを払いのけて父親を谷底へ落とそうとする倅の光景であった。このとき、辰平はわが母親の立派さ、気高さを痛感したに違いないのだ。

家に戻ると、おりんが使用していた帯や綿入れは既に残された家族が使っている。前日の残りのどぶろくはもう孫が飲んで酔っ払っている。おりんがすうっと消えていったという印象を我々読者は受けるだろう。確実に世代交代が行われているのだ。

26. 福永武彦『忘却の河』　2007年6月

本来孤独を抱えた人間はいったいどのようにして他者と触れ合うことがで きるのか。『忘却の河』のみならず、福永作品にはこのテーマが一貫して流れている。

藤代一家の不幸は、互いが心に秘密を抱え、それを打ち明けられないまま、いわば思い込みで相手との間に壁を築いてしまったことに最大の要因があった。

藤代の場合、恋人が自ら命を絶ち、良心の呵責を抱いたまま親の薦める見合い相手と結婚した経緯がある。妻のゆきは夫の出征中、呉との恋に陥るが、その呉は戦死する。長女の美佐子は長い間寝たきりの母親の看病に明け暮れるが、なかなか父親の薦める見合い相手との交際に踏み切れないでいる。というのも、彼女にはときどき逢瀬を重ねる美術評論家三木の存在が影を落としていたためだ。一方、三木も自分の家庭を壊してまでも美佐子と深入りするつもりはない。また、次女の香代子は大学で演劇活動に明け暮れる活発な女性だが、母親の秘密を知って以来、自分は母親と呉との間に生まれた子ではないかと疑う。

この作品の中でとりわけ印象的なのは、藤代が家族から「冷たい人」として敬遠されていることだ。その中で、彼を唯一「自分のやさしさを無理に殺している」と評した人間がいた。それが、雨の中動けなくなっているところを藤代に助けられた若い女性であった。「小父さんのそういうとこがとても好きよ」という彼女の言葉に藤代の心は慰められた。このとき、彼は他者に対して無防備でいていいのだということを知ったのではないか。

藤代はかつて恋人が身を投げた日本海の崖を訪れ、賽の河原で回向する。ふるさとを知らない藤代にとって、かつての恋人のふるさとが心のふるさととともなった。また、自分の記憶に残っていた子守唄は誰が歌っていたのか、美佐子はそれを知りたくて母に尋ねたり、二十年間会わなかったかつてのねえや「初ちゃん」のもとを訪れて確かめたりした。しかし、作品の結末でそれは父親が幼い美佐子に機会あるごとに歌っていたという事実が明らかにされる。このとき、美佐子は父親の愛情に触れたに違いない。

確かに藤代が結婚したとき、そこにはある種の妥協があったことは否めない。しかし、本人も自ら述べているように、彼は妻や娘を愛そうとは努めた。それが仮に不器用なものであったにせよ、彼のその思いに偽りはなかった。ただ、言葉の足りない藤代は家族に余計な憶測を抱かせ、それがお互いの間に溝を作る結果になってしまったのである。それだけに美佐子が子守唄の由来を知る結末部分は、この一家に一筋の光をもたらしていると言えよう。

27. 安部公房　『砂の女』 2007年7月

昆虫採集のため砂丘を訪れた男が、結局ここに落ち着いてしまい、失踪者となってしまう経緯を語っているのが『砂の女』である。

この男は学校の教師であり妻もいる。作品の結末で彼の失踪届が提示され、そこで彼の名が「仁木順平」であることが明らかにされるが、作品では一貫して彼は「男」と呼ばれ、固有名詞を与えられていない。それは彼がこの砂丘で出会い、暮らしを共にする相手が絶えず「女」と呼ばれているのと相応している。いわば社会性を剥奪され、まさに一対の「男と女」として向き合うことを彼は余儀なくされるのである。

バスがなくなり、そこにいた老人に泊まる場所がないかを尋ねたことがそもそものきっかけだった。砂と格闘している部落の人々にとって、彼はちょうど好都合な働き手だったのである。

彼が紹介されたのは、砂の穴で暮らしている女の家であった。縄梯子が外され、彼は脱出することができなくなる。女は何の疑いもなく、その状況を受け入れている。作品の中でとりわけ印象的なのは、彼が目覚めたとき、素裸の女が顔以外の全身を剥き出しにして畳の上に寝ているところを目撃する場面である。汗をかく、しかも砂が畳を覆うという状況の中でこれは致し方のないことだったのかもしれない。

彼らの生活ぶりは上から覗かれている。彼が仕事をすれば水や食事が与えられるし、挙句の果てはこの女との性交も男はするようになった。

男はいったんここからの脱出を試みる。それは成功したかに思われた。だが、彼は泥濘（ぬかるみ）にはまってしまい、村人たちに助け出されるのだ。

やがて女は妊娠する。ある日彼女が下半身を染めて激痛を訴えたため町の病院へ入院させられることとなった。半年ぶりで縄梯子が下ろされ、女は連れ去られて行く。しかし、縄梯子はそのまま垂れ下がったままである。

べつに、あわてて逃げ出したりする必要はない。男はそう考える。いつしか新聞を読むこと自体にも興味を失っていた彼だが、何かが彼の内部で変わり始めている。「逃げるてだては、またその翌日にでも考えればいいことである」本文はこの一文で終わっている。しかし、巻末に据えられていたのは、7年以上経っても姿を見せずに「失踪者」と認定された家庭裁判所の審判であった。男はここからの脱出そのものを諦めたのであろうか。真相は謎のままである。

ただ、この砂の穴の暮らしにも拭い難く日常生活が浸透していた。最初はそれに違和感を覚え、抵抗すら試みていたはずの彼は、＜砂の女＞という日常にすっかり絡め捕られていたのである。彼が逃げても逃げなくても、状況は大差なかったのかもしれない。

28. 辻邦生 『廻廊にて』 2007年8月

「マーシャが死んでも、俺が予想したような空無感は生れなかった。マーシャの死だけはちがっていたのだ。いや逆にマーシャの死は、俺に、空虚ではなく充実を教える稀有（けう）の例となったのだ」マノリス・パパクリサントスは「私」にこう語る。

亡命ロシア人であり、異例の才能を持ちながらも寡作であった女流画家マーシャ。結婚にも破れ、傍から見ると決して幸福であったとは思われない生涯である。しかし、果たしてそうだったのか。かつてマノリスの言葉の聴き手であった「私」は、ある衝動に突き動かされ我々に語り始める。

危険に晒されているときこそ、生きているという実感に貫かれると語っていた少女アンドレとの出会いは、マーシャを一時虜にした。それは彼女が芸術衝動に貫かれているときの感覚と相通じるものがあったからである。しかし、更なる危険を追い求めるアンドレの生き方は、やがて彼女の墜落死を招いてしまう。

アンドレが凡庸な市民生活を嫌悪したのに対し、マーシャはむしろそれらに安らぎを覚えていた。マーシャが長らく制作不能に陥っていたのは、本来彼女が持っていたそれらを忌避し、芸術至上主義的な方向へ自らを強いて向かわせようとしていたからである。それに彼女自身気づいたのが、作品の末尾、すなわちタピスリを見て陶酔感を覚えたときであった。このとき彼女は永遠の時に満たされ、宿命の成熟という想念に思い至る。それまでの彼女の精神的彷徨はこのときを迎えるための準備期間でもあったのだ。

この少し前、彼女は社会運動家ローザと出会っている。いかに悲惨な状況にあっても「人間が人間であろうとする意志」を持つことの大切さをローザは訴えていた。ローザはやがて銃殺刑に処せられるが、ローザの精神は確実にマーシャに伝わったのである。マーシャは病床の中にあったとき、「人間の一人一人も、ひょっとしたら＜人間＞という種族の花々を、そこに咲かしているのかも知れない。次から次へと散ってゆくけれど、同じ花が咲きつづけているのかも知れないって、考えられるでしょ？」とマノリスに語っていた。ここでマーシャはローザから貰い受けた精神を、今度は自らの言葉で語っているのだ。そしてこの言葉はマノリスを勇気づける。

ローザからマーシャ、マノリス、「私」、そして我々読者へと、一つの精神が継承されようとしている。人の生命には限りがあるが、この精神が受け継がれようとするとき、人々は聴き手から語り手に転じようとする。その繰り返しこそが人類の宿命なのかもしれない。

29. 武田泰淳　『森と湖のまつり』 2007年9月

「アイヌを描きたい」、その切なる思いで北海道を訪れた佐伯雪子であった。しかし、ビホロの開基66周年、町制施行30周年を祝う絵の制作を依頼されたことをきっかけに、彼女はさまざまな荒波に翻弄されていくことになる。そこにはシャモ（和人）とアイヌの確執があったし、アイヌの案内役をお願いした学者、アイヌ統一委員会委員長の池博士は必ずしもアイヌたちから歓迎されているわけではなかったのだ。

池はある意味で理想主義者である。失われ行くアイヌの伝統や風習を守ろうとする姿勢は純粋そのものだ。しかし、かつて彼の妻であった鶴子に言わせると、彼の家にびっしり陳列されたアイヌの品々は彼女に圧迫感しかもたらさなかった。それらはもはやアイヌたちの「生きた」品々ではなくなっていたし、それに気づけぬ池は「アイヌのため」と言いながらも、私欲のためこれらにすがっていたと言えるのかもしれない。

統一委員会で池の片腕であったはずの風森一太郎は、今では池と連絡すらとれない状況にある。そして、方々で騒ぎを起こし、危険視すらされている人物だ。一太郎に頼まれて根室標津の網元の家を訪れた雪子は、彼の引き起こした事件に巻き込まれたことがきっかけで彼の仲間と目され、激しい暴行を受けることになる。彼女はこれらを通じて、この土地の現実をしたたか思い知ったはずだ。そして、彼女は偶然のいたずらでこの夜一太郎と小屋で結ばれたりもした。

一太郎の姉、風森ミツは周囲からも一目置かれた女性である。その彼女も、かつては結婚していたシャモの先生に逃げられ、その憎しみから相手の殺害を当時12歳だった弟の一太郎に依頼したことがあった。しかし、その自分の恐ろしさに気づいたときこそ、彼女が真にクリスチャンとして生き始めたことを意味する。結局、一太郎は先生を殺すことはできなかったし、先生自身はピリカメノコを裏切った自責の念に耐えられず、その後「おど」となっての放浪生活を余儀なくされる。

作品は、ベカンベ祭のためトウロ湖に集まってくる人々がもたらす事件や出会いを軸に展開される。愛憎が入り乱れ、人間関係が複雑に絡み合い、物語は混沌そのものだ。しかし、先生「おど」の死、一太郎と網元の長男との決闘、さらには池博士の自宅の全焼といった事件を経過していく中で、一つの方向性が見出されていく。

網元の長男は父親を説得して自らがアイヌであることを認めさせ、アイヌを雇い入れるようになったし、鶴子は池博士のもとに戻った。そして、一太郎は決闘以来姿を消し、その存在は伝説化される。「彼女（注・雪子）は、風森一太郎の子供を身ごもっていた。」作品はこの一文で締め括られる。やがて母親となる雪子は今後いかなる絵を描いていくのであろうか。それは誰にも分からない。

30. 宮本輝　『泥の河』 2007年10月

昭和30年の大阪。河畔でうどん屋を経営する家の一人息子である信雄は、ある時同じ年の少年と出会う。名前は喜一。最近引っ越してきた舟に住んでいた。これが廓舟であることは8歳の信雄にはもちろん知る由もない。ただ、周囲の大人たちの会話の端々から、喜一の家族が嘲笑と蔑視の対象とされていることは子供ながらに勘づいていた。

喜一との出会いは、鉄屑を盗もうとしている彼を信雄が咎めたことがそもそものきっかけだった。喜一は後に天神祭りの屋台からおもちゃのロケットを盗むこともしている。喜一には盗癖があったのだろう。それでも信雄が喜一と友達になったのは、喜一の置かれた境遇を憐れむ気持が働いていたからではないか。定住することを許されない喜一になかなか友達ができなかったであろうことも想像に難くない。喜一の母親は、男を相手にすることだけしかできず、十分子供の面倒を見ることもしていない。息子のズボンのポケットに穴が開いていたことも彼女はおそらく知らなかったはずである。

信雄はこの家族と出会い、異性に目覚める。一人は喜一の姉銀子、もう一人はその母親である。汚れた足を丁寧に洗ってくれた銀子は、信雄にとって憧れの対象ですらあった。一方、その母親と出会ったとき、その美しさに惹かれながらも彼女が発する不思議な、なまめいた匂いに落ち着かなさを彼は覚える。それは身体を売る彼女が発する妖艶さであった。

それだけに、作品の最後で、彼がたまたま舟の隣の部屋で、その母親の上で人間の背中が波打っている光景を覗き見てしまったときの衝撃の大きさは想像に余りある。このとき彼女はしっかりと信雄を見つめ返していた。それからほどなくしてこの舟がこの場所を離れて行ったのは、いわば必然的な流れだったのである。

信雄が垣間見たのは大人の世界であった。それは彼にとっていかにも恐ろしい光景である。しかし、その意味をやがて彼は知ることになるだろう。

その一方で、彼は喜一の残忍さ、凶暴さを目の当たりにした。雛鳥を寄越せと迫る中学生の双子に刃向かうように雛を握り潰し、それを相手の顔に投げつける。あるいは、ランプ用の油に蟹を浸し、そこに火をつけてその姿を「きれいだ」と言って楽しむ彼の態度に信雄の膝は震えた。このとき、彼は喜一とは本質的に相容れないものを感じ取ったのではないか。このとき既に喜一との別れは予感されていた。

泥の河、それは大人の現実世界を暗示しているとも言えるだろう。

31. 三浦綾子 『氷点』　2007年11月

周囲から見れば誰もが羨むような家庭の中に潜む暗部を抉り出した作品、それが『氷点』である。殺人犯の娘を養女として引き取りながらも、その事実を妻には隠すという設定そのものが衝撃的であるし、そこに妻への復讐の念があったことを後に知った妻が継子いじめを行うという展開は確かにメロドラマふうな側面があったと言えよう。

しかし、そのことだけに目を奪われてしまうとこの作品の本質を看過してしまうことになるのではないか。

啓造には自分を心の底から信頼してくれる高木という親友がいた。彼はかつて夏枝に思いを寄せていたものの、啓造が彼女と結婚すると知って潔く諦めた男である。啓造以外の男なら高木は決して譲る気はないと広言していた。

殺人犯の娘を引き取るというのは、啓造と高木二人だけが知る秘密であった。通常なら考えもつかないことを申し出た啓造の心には、高木が期待する人間像に応えたいとする、彼なりの潜在的な欲望が渦巻いていたことが想像できよう。

しかし、いざ陽子を引き取ってから、啓造は現実はそう甘くないことを痛感させられる。＜理想とする自分＞と＜現実の自分＞の狭間で常に葛藤する男、それが啓造なのである。社会的信用もある彼は、夏枝と村井の浮気を疑いつつも、それを正面切って問いただすことができない。それが逆に妄想を膨らませ、余計啓造を苦しめることにもなる。実はこのような人物造型は、漱石のとりわけ後期三部作以降の作品ではおなじみである。

一方の夏枝は、自分の美貌に自信をもっていたし、夫の留守中に村井を呼んで彼に見合い話を持ち出したのも、彼が日頃自分に好意を寄せているらしいということを確認したいという、いわば自己満足的なものだった。深入りするつもりは彼女にはなかったのである。確かにその時間帯に娘のルリ子が殺され、彼女は精神喪失の状態に陥った。だが、彼女は村井と浮気をしたという認識はもっていない。夫になぜここまで恨まれなければならないのか、彼女には納得がいかないのであった。そして、彼女に基本的に反省をする姿勢がないことは、夫と極めて対照的である。

その夫婦の間で犠牲になったのが陽子であった。いかなるときでも泣き言を言わず、健気に生きる彼女の姿は確かに読者の涙を誘うものがあるかもしれない。しかし、陽子の心の中には、「自分さえ正しくあれば」という思いが絶えずあった。彼女が自らの出生の秘密を知らされ、生きる意欲を失ったのも、結局はそれまで自分を支えていた信念が崩壊したからに他ならない。人間は本来矛盾を抱えた存在である。そのことを頑なに拒もうとしたところに彼女の脆さがあった。

32. 吉本ばなな 『キッチン』　2007年12月

「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。」そう語る「私」こと、桜井みかげは、料理をするという行為によって他人との繋がりを確認していたのだろう。

両親を早くから失い、祖母の手によって育てられていたみかげにとって、祖母の突然の死はまさに「びっくりした」事件であった。その彼女に救いの手を差し伸べてくれたのが、みかげの祖母行きつけの花屋でアルバイトをしていた田辺雄一であり、その母親（といってもかつては男性であり、雄一の生母と結婚していた）であるえり子だった。みかげがこの家で居心地の良さを感じたのには、それなりの理由がある。

彼女はまずこの家の台所をひと目で気に入っている。それにこの母子は本当の血の繋がりがない。しかし、他に身寄りのないこの二人はだからこそ自らの孤独を認識し、お互いを思いやることも可能だった。みかげを受容できる土台が既に二人には出来上がっていたのである。三人は擬似家族を構成し、みかげの作る料理は二人を喜ばせた。

しかし、自立を目指すみかげはこの家を離れ、有名な料理研究家のアシスタントとなった。毎日の生活に忙殺され、田辺家としばらく疎遠となっていた間にとんでもない事件が起こる。えり子さんがストーカーに殺害され、雄一も一人になってしまっていたのである。かつてみかげを救ってくれた雄一が今度は同じ境遇に置かれることになった。

かつてはえり子、雄一、みかげの三人で幸福な家族的空間を作り上げていたはずなのに、えり子という支点を失い、残された二人は微妙な立場に置かれることになる。みかげには雄一がすべてのものから離れて行こうとする気がしてならない。その彼の気持は痛いほど分かるし、かといって彼を失いたくない。だが、それが愛なのかどうか自分でも判断がつかない状態にいる。

その彼女に、雄一の様子を心配してみかげにそれを知らせに来た人間がいた。えり子さんの店をついだオカマのちかちゃんだ。ちかちゃんはみかげに、今雄一が泊まっている宿を教えてくれる。

伊豆の旅先で食べたカツ丼が非常においしく、それを雄一に食べさせたくて持ち帰りを注文し、タクシーを呼んでみかげが車を走らせるくだりはこの作品の忘れ難い場面であろう。「どうして君とものを食うと、こんなにおいしいのかな。」かつて雄一はこうみかげに言っていた。この二人は「食べる」という行為を通して互いの繋がりを確認し合うのである。

「孤食」「個食」などということが問題とされる今、この作品は改めて我々に大切なものを教えてくれているようだ。

33. 小川洋子 『博士の愛した数式』　2008年1月

博士は、交通事故で頭を打って以来、記憶は80分しかもたない。しかも、変人扱いされており、それまでの家政婦は博士との折り合いが悪く、いずれも長続きしなかったのである。

では、なぜこの主人公である「私」だけが例外でありえたのであろうか。それは出会いそのものが「私」にとって魅力あふれるものだったからである。「私」の誕生日である2月20日「220」と、博士がかつて受賞した学長賞の番号「284」。「220の約数の和は284。284の約数の和は220。友愛数だ。(略)君の誕生日と、僕の手首に刻まれた数字が、これほど見事なチェーンでつながり合っているなんて」

「私」にとって十分すぎるほど魅惑的な言葉であった。「私」はこの一言によって、博士との宿命的なつながりを実感させられたのである。一見すると無味乾燥に思われるものが、一つの光をあてることによって神秘的な相貌を表すということを「私」は気づかされたのだ。それは博士に「ルート」と命名された彼女の息子の場合も同様である。

博士は結果以上にプロセスを重んじる。彼はしばしば数学の雑誌に掲載されている懸賞問題に応募し、当選もする。しかし、その結果に対しては冷淡だ。彼にとっては正解を導くまでの道筋こそが大切な時間なのである。ルートに数学を教えているときもそうだ。答えが合っていればいい、というものではなかった。むしろ間違いを喜んだところに博士の本質が現われている。「私」もルートも、博士と世界を共有すべく数学の世界に魅せられていく。

その様子を嫉妬しながら眺めていたのが、博士の義姉にあたる女性である。彼女の夫、すなわち博士の兄は既に他界しているが、生前中から義姉と博士は恋愛関係にあったらしい。後年、博士は交通事故を起こすが、そのとき同乗していたのは彼女である。彼女は左足を骨折し、博士の記憶は1975年で止まってしまった。彼女は博士の隣に住んでいるが、現在博士の目に映る未亡人はただの年老いた女性であり、かつての恋人ではない。その過酷な現実と向き合いながら、彼女は家政婦母子と博士との睦まじい姿を羨望の思いで見ていた。

とうとう博士の記憶が全く失われたとき、未亡人は「私」にこう言った。「義弟は、あなたを覚えることは一生できません。けれど私のことは、一生忘れません」これは勝利宣言とも言えなくはない。しかし、この言葉には憐れさも滲んでいる。事実、彼女は「私」に対して柔軟な態度をとるようにもなった。

博士の記憶から「私」の存在は失われた。だが、「私」やルートの心の中には博士と共に過ごした時間が鮮やかな記憶として残る。そしてルートは、数学の教師として教壇に立とうとしているのだ。

34. 川上弘美 『センセイの鞄』　2008年2月

この作品を読んだときに、漱石の『こゝろ』を思い浮かべる人は少なくないだろう。語り手が自分と深く関わりをもったある人を「せんせい」と呼ぶ事にこだわるその姿勢において、両者は共通している。

ただ、『こゝろ』が徹底して登場人物たちの名前を隠蔽していたのとは対照的に、『センセイの鞄』ではその相手の名前が「松本春綱」であることも明らかにされていた。それでも、語り手である大町月子はその人を「センセイ」と呼ぶ事を選択する。しかもこの手記においては「先生」でも「せんせい」でもなく、「センセイ」と書く事に彼女はこだわっているのだ。この三つはいずれも発音は変わらない。ということは、「センセイ」という表記へのこだわりはまさに彼女がこの回想を書き始めるにあたって生まれたものなのだ。

「センセイ」と月子は、高校時代の国語教師と生徒の関係である。再会して2年、そして「正式なおつきあい」をして3年、二人は深い関係になってからも呼び方が変わらなかったのである。

作品の中で、高校時代の同級生、小島孝が登場する。彼は高校の頃、月子に思いを寄せていた。久しぶりの再会以後、彼はしきりに彼女をデートにも誘い、彼女もそれに応じたりはするが、絶えずセンセイのことは脳裏から離れない。そして、彼女は作品を通して彼の事は一貫して「小島孝」と呼んでいる。この両者の違いは誠に興味深い。

センセイは、真面目で不器用なタイプの人間だ。キノコ狩りをするとなればキノコについて予習を行い、皆が食べているときに平気で毒キノコの話をする。周囲にはおかまいなしだ。どこへ行くにも背広姿で鞄を携えている。センセイにとって鞄はもはや身体化された存在だったのだろう。

月子と正式にお付き合いをするけじめとして、亡くなった妻の墓に彼女を連れてきたまではいいが、「ワタクシは、今でもやはり妻のことが気になるんでしょうかね」としか言わなかったために、月子を憤慨させたりもする。言葉が足りないのだ。

しかし、既に恋愛気分にひたっている彼女に、「ワタクシと、恋愛を前提としたおつきあいを、していただけますでしょうか」という言い方をしてしまうセンセイにある種の微笑ましさを感じるのは私だけであろうか。結婚の前には恋愛がある。それぞれの段階をおろそかにできない、それがセンセイの性格だ。

慌しい現代にあって、あらゆることがなし崩しにされていく。それだけにセンセイのこの不器用さは逆に輝きを増すのではないか。利害や打算とは無縁なところで展開される「年の差カップル」の物語だからこそ、読者はこの作品を新鮮に受け止めているとも言えそうである。

35. 徳冨蘆花 『不如帰』 2008年3月

明治30年代初頭に発表された『不如帰』は空前の反響を呼ぶことになる。仲睦まじい新婚夫婦が「家」の論理によって引き裂かれるという物語に多くの読者は涙した。封建的な家族制度が厳然としてあり、結婚もまず「家」が「個人」よりも優先されていたのであった。その最たる場面は、新妻の浪子が肺結核となったことを知ったときの姑お慶の態度である。

彼女は息子の武男に父親の位牌を示し、「妻が大事か、親が大事か」と二者択一を迫る。彼女からすれば、息子がこの際浪子を選択することは川島家の滅亡をも恐れない「不幸者」のすることであり、少なくとも彼女の頭には浪子を一個人として尊重する発想は全くない。息子の嫁は幾らでも取り替え可能なのである。この考えは当時において何もお慶一人だけが突出していたわけではなかった。ましてや肺結核が「死病」として恐れられていた当時では尚更のことである。

確かにお慶を不安に駆り立てた要素の一つに、かねてより浪子に懸想をし、武男を快く思わない千々岩安彦の口添えがあった。私印偽造、官金横領の噂がささやかれる千々岩はかつて立身出世の近道として、武男の父親に接近しようとしてそれが適わなかったという経緯がある。

浪子の追い出しは武男の不在中に行われた。片岡家への使いを負かされた山木は、事の次第をなかなかうまく伝えられない。しかし、事情を察した片岡中将は、「で、武男君はもう帰られたですな？」と確認をする。それに対して、山木は「いや、まだ帰りませんでございますが、もちろんこれは同人（ほんにん）承知の上の事でございまして」という返答をした。これは明らかな嘘である。しかし、これが片岡中将の心を決めさせた。夫が認める以上、抵抗するのも無駄だ。そう中将は判断したのである。山木のその場凌ぎの一言は極めて重要な意味をもったと言わざるをえない。

このようにして若い二人は引き裂かれるのだが、たまたますれ違う列車でお互いを確認し合う有名な場面を除いては、この二人がその後顔を合わせることはない。引き裂かれたとはいえ、なぜ武男が浪子に会いに行こうとしなかったのか、疑問は拭いがたく残る。引き裂かれた後の武男が極めて好戦的な男として変貌するくだりも、読者にとっては意外な感を否めないだろう。

この作品は、宗教小説としての側面も覗かせている。絶望に駆られて自殺を試みようとした浪子を救ったのが小野清子というクリスチャンであった。別れ際、彼女によって手渡された聖書に浪子は慰められる。

亡くなる間際の「ああつらい！　つらい！　もう一婦人（おんな）なんぞに一生まれはしませんよ。ああ！」という浪子の悲痛な叫びは、封建的家族制度の犠牲者となった彼女の姿を浮き彫りにしており、痛々しい。

36. 木下尚江 『火の柱』 2008年4月

篠田長二に注目するか、それとも彼を心ひそかに慕う山木梅子に注目するか。そのいずれにウェイトを置くかによって、『火の柱』はかなり異なった相貌を見せるのではないか。

篠田はキリスト教社会主義者としての立場から、日露戦争に対して非戦論を唱え、その主張を同胞新聞の中で展開する。その主義は徹底しており、しかも三十歳となった今でも独身を貫いている。彼は神こそが自分の嫁なのだと広言して憚らない。

その彼を慕っていたのが梅子であった。しかし、彼女は自らの思いを抹殺せざるを得ない状況に置かれていた。なぜなら、篠田が陸海軍御用商人として攻撃した一人が九州炭山株式会社の取締役山木剛造、すなわち彼女の父親だったからである。

彼女は現在の父親を好いてはいない。剛造は妻の死後、教会へも通わなくなり、俗物化してしまった。後妻のお加女は、梅子を松島大佐に無理やり嫁がせようとしている。松島は実質的な海軍大臣と評されている人物であるが、人品は卑しく、しかも先妻に先立たれた年配の男。梅子が松島との結婚を承知するはずがなかった。

梅子もまた独身主義を広言するが、篠田と決定的に違うのは、彼女の場合ほとんど身動きのできない状態の中で、こうするしか方法がなかったことである。篠田と互いに気持ちを通わせていたのであれば、家を捨て駆け落ちをするという選択もありえたであろう。しかし、篠田にそれを求めることは土台無理であった。彼女は自分の気持ちをひた隠す。しかし、それを隠しきれなかったことは、弟の剛一や女学校の先輩だった菅原銀子の言葉が証明している。

その彼が拘引されるとの情報を聞きつけ、それを梅子が本人に伝えに行った際、二人は初めて互いの思いを確認し合う。しかし、逃亡することは篠田の望むところではない。彼は自ら入獄を選ぶのであり、後事を彼女に託す。彼女への「社会主義の母となって下さい」という言葉が、二人のその後の関係を暗示していると言えよう。

この作品には、篠田を窮地に追い込むべく、警察がスパイを送り込んだ事実も書かれている。だが、スパイである吾妻がいくら探っても、篠田を糾弾すべき材料は見つからない。そのことを報告しても、「そんな筈はない。なんでもいいから出せ」という要請があり、吾妻は事実を捏造することになった。篠田を非難中傷する新聞記事はそのようにして書かれたのである。警察という官僚組織の体質を暴こうとする作者の意図がここでは見られる。

『火の柱』は、明治期における社会小説の代表作として位置づけられている。確かにそのような側面はある。ただし、梅子に焦点を据えた際、男尊女卑的な家族制度の中で呻吟する女性の嘆きを伝えた作品という側面もあることは見逃すべきではない。

37. 二葉亭四迷 『浮雲』 2008年5月

役所を免職になった内海文三と、逆に5円の昇給になった本田昇。文三は父親を早くに亡くし、田舎には母親を残している。今は叔父の園田家で下宿をしているが、近いうちに母親を呼び寄せ、結婚もしたいと考えているが、その相手として園田の娘であるお勢を漠然と思い描いていた。その矢先の免職である。彼が落ち込んだのは言うまでもない。

文三の免職を知って態度を豹変させたのはお勢の母お政である。日頃から本田が課長に絶えずご機嫌伺いをしていたのに、一方の文三は自分の忠告を無視していた。今回の免職は自業自得である。それが叔母の論理であった。お政はもともと文三とお勢を一緒にさせようと考えていた。しかし、本田の月給が35円になったことを知り、急に目の色を変える。彼女がそれまで文三にやさしかったのは、彼が官吏だったからに他ならない。 文三、本田それぞれが思いを寄せるお勢は、語り手によって「根生(ねおい)の軽躁者(おいそれもの)」と揶揄されていた。彼女は他人を「無教育」という言葉で見下す傾向があるが、そこには自分には教育があるという思い込みがある。しかし、腹を立てたときは「文三の畜生」と悪態をつくことに象徴されるように、決して知性的な女性とは言いがたい。近所の子供が入塾したと聞けば自分もそうしてくれと親に無理を通そうとするし、その一方で飽きやすい一面も持っていた。

その彼女を美化し、あたかも二人の間には確たる関係があると思い込んでいたのが文三である。お政とお勢が本田の誘いで団子坂の観菊(きくみ)に行ったことでうろたえたり、あるいは彼女の心が本田に傾斜したと断定するや、「寧(いっ)そ別れるものなら……綺麗に……別れようじゃ……有りませんか……」と宣言する文三の姿を見ていると、彼が完全に独り相撲をしていることが明らかだ。「誰が誰に別れるのだとは何の事です。」とお勢が呆れ返るのも無理はなかった。

そもそも彼女は、文三が免職になったとき、そのこと自体を非難などしていなかった。彼を悪し様に罵る母親と喧嘩していたのが彼女だったのである。事実文三はそのことをお勢本人の口から聞いて励まされもした。しかし、もともと内気だった文三は自分の思いをお勢に伝えていたわけではない。その点では、この二人は恋愛関係にあったわけでもないし、ましてや結婚の約束など存在もしなかった。ただ状況に身を任せ、勝手に二人の関係を恋愛関係と妄想することが彼の嫉妬を増幅させていたのである。 同じ屋根の下で嫉妬に駆られ、もがき苦しむ知識人の姿は後の『こゝろ』(夏目漱石)にも繋がるものと言えよう。男女交際が今ほどオープンになっていなかった時代だからこそ、このような物語が可能だったのだ。

38. 幸田露伴 『五重塔』 2008年6月

五重塔建立の話を伝え聞き、川越源太にその仕事が委ねられようとしているにもかかわらず、我が身を顧みず朗円上人に直談判を決行した十兵衛。周囲からは「のっそり」と渾名され、卑しめられているこの男は、たとえ自分の行動が義理や人情をかなぐり捨てることになろうとも、臆することはない。

一方の源太にしても十兵衛の態度は内心面白くなかったはずである。既に感応寺建立の実績があり、その寺から塔を建てる話が来るのは極めて自然なことだ。しかし、双方の話し合いで決めよという上人の言葉に従い、彼は可能な限り十兵衛に対して誠意を示す。

源太は日頃、面倒見のいい男として評価されていた。彼のそのような行動を支えていたのは、あるべき＜好い男児＞、あるいは＜俠気＞の理念である。

一方、十兵衛にも彼なりの＜俠気＞があった。それは、いったん上人の信頼を得て仕事を任せられた以上は全ての責任を自らが負うという覚悟である。彼が「二人で仕事をしよう」との源太の提案を斥けたのも、自分が寄生木になることも寄生木を受け入れることも潔しとしないからであった。後に源太が自分の描いた下図や見積もりを提供しようとしたときも、彼は「別段拝借いたしましても」と言って源太を怒らせる。だが、この発言も十兵衛にとっては＜俠気＞の現れに他ならない。十兵衛には本音と建前の区別というのはなかった。

源太を慕う清吉が十兵衛に対して凶行に及び、十兵衛は左耳をそぎ落とされ、肩先も切り裂かれた。だが、それでも彼は翌日現場に向かおうとする。制する妻のお浪に対し、彼はこう言う。「高の知れたる蚯蚓膨（みみずばれ）に一日なりとも仕事を休んで職人どもの上に立てるか、（略）万が一にも仕損じてはお上人様源太親方に十兵衛の顔が向（むけ）られうか」。彼は決して源太を軽んじてはいなかったのである。

激しい暴風雨の中でも、十兵衛は落成式間近の塔の様子を見に来ない。それは自分の仕事に自信があるからだった。しかし、塔が倒れることを心配した寺の者は上人様が呼びつけているとの嘘を言い、十兵衛を呼び寄せようとする。上人様の仰せと聞いた時の十兵衛の衝撃は殊の外大きい。こうなった以上は自らの命も惜しくないという彼の言葉に、それまでの上人様に対する信頼のほどが伺える。こうして彼は、塔の上に立って暴風雨に晒される。そのとき、塔の下を幾度となく徘徊する男がいたことも語り手は付け加えるのを忘れない。

結局塔は倒れなかった。こうして十兵衛の名声は確立される。落成式において、上人は「江都の住人十兵衛これを造り川越源太郎これを成す」と銘を記した。この一連の出来事を通し、上人、源太、十兵衛の信頼関係はより強固なものになったと言えよう。それは我々凡人の想像の域をはるかに越えている。

39. 国木田独歩『忘れえぬ人々』　2008年7月

亀屋という旅人宿（はたごや）で偶然落ち合った無名の文学者大津弁二郎と無名の画家秋山松之助。大津がいま書きかけの原稿「忘れ得ぬ人々」の詳しい中身について語る、というのがこの作品のあらましである。

大津がここで口にした「忘れ得ぬ人々」は三人いた。

一人は十年前、大津が体調を崩して保養のため東京の学校を退学し帰省をする際のこと。瀬戸内沿いの汽船から見えた一人の人物。淋しい島影の小さな磯を漁っていた姿を彼はその後何度も思い起こしたという。

二人目は、五年ほど前、旅行へ出かけ、熊本から大分へと九州横断をしたときのことであった。荒涼たる阿蘇の草原から駆け降りて人里にやってきたとき、屈強な若者が澄んだ声で馬子唄を歌いつつ、馬の手綱を引いて通り過ぎて行った。夕月の光を背にしていたため、その横顔もはっきりとは知れなかったが、その黒い輪郭だけが目に焼きついているという。

そして三人目は四国の三津ヶ浜に一泊して汽船を待っていたとき。町を散歩していると一人の琵琶僧が琵琶を奏でていた。彼を顧みる者は一人もいない。周囲の喧騒の中、大津はこの琵琶僧の姿に釘付けとなった。

大津は言う。なぜこれらの人々を忘れることができないか。それは「憶い起す」からだ、と。

大津は地方から立身出世を夢見て上京した青年の一人であった。しかし、願いが果たせず、その後失意の中で内面の苦しみを抱えながら文学を拠り所として自己を確立しようとしている。彼自らが言うように、絶えず「生の孤立」を感じているのが大津青年だったのだ。

彼がこれらの人々に惹きつけられ、今でも忘れることができないのは、彼らがいわゆる「名利競争の俗念」から全く無縁のところで生きているように感じられたからである。大津は彼らを思うときほど心の平穏を感ずることはないと言う。それだけ彼には自分が立身出世コースから外れた人間であるという意識が拭い難く残っていたということだ。大津にとって彼らは慰めの対象だったのである。

この作品には落ちがある。

二年後の大津は東北の地にいた。秋山との交際は全く絶えている。大津の目の前には二年前と同じ「忘れ得ぬ人々」の原稿が置かれてあり、その最後に書き加えられたのは「亀屋の主人」であり、「秋山」ではなかったというのである。

じかに接し、会話を交わした人間は「忘れ得ぬ人々」の登場人物にはふさわしくない。あくまでも言葉を交わすことなく、遠くから眺められた対象こそが似つかわしいのである。それが「忘れ得ぬ人々」のイメージを保つためにはどうしても必要であった。そこに文学者大津のある種の限界を認めることはあながち間違いとは言えないであろう。

40. 森鴎外 『高瀬舟』 2008年8月

同心の羽田庄兵衛にとって罪人喜助との出会いはまさに根底を覆されるほど衝撃的なものであった。

遠島を申し渡された喜助はそのことを悲しむどころか、喜んでさえいる。今まで住んでいた京都では苦労ばかりの日々であり、それに比べれば島での暮らしは彼にとって苦痛ではない。ましてやお上から与えられた二百文の鳥目（お金）は、今まで手元にお金が留まったためしのなかった彼には恵みですらあった。

彼の罪状もしかりである。弟殺しの罪人と聞かされていた庄兵衛ではあったが、彼はそれが果たして弟殺しと言えるのかどうか喜助の話を聞くに及んで深い疑問に囚われざるを得なかった。両親を早くに失い兄弟二人で暮らしていたものの、弟は長患いで床に伏せっていたのである。兄に迷惑をかけることを苦にした弟はある日自ら命を断とうとする。喜助が帰宅して目にしたのは剃刀を首に刺したままもがき苦しむ弟の姿だった。

喜助は弟の必死な訴えに促され、剃刀を引く。ようやく弟の願いを聞き入れたとき、弟の目に喜びの表情が浮かんだことを喜助は決して忘れていない。ここには喜助と弟の二人だけにしか伺い知れないドラマがあった。それに比べれば、自分が弟殺しの罪人かどうかは喜助にとってさほど大きな意味を持たない。

庄兵衛は喜助の頭から毫光がさすように感じた。彼は喜助の中に自分には及びもつかない人間的偉大さを見出したのである。そこに庄兵衛の過大評価があったことは否めない。庄兵衛は自らの生活感覚に照らして喜助を眺めていたのであり、彼を欲のない人間と捉えたこともその点では無理もなかった。

庄兵衛は家族を持ち、時には妻との間に諍いを起こしている人間である。その諍いの原因の殆どが生活問題であり、彼は喜助の話を聞きながら我が身の場合を振り返らざるを得なかった。庄兵衛が驚異の目で喜助を眺めていることなど、当の喜助は知る由もない。それは純粋に庄兵衛の内面でのみ生じたドラマであった。『高瀬舟』はこのように喜助、庄兵衛それぞれの内面に展開されたドラマが互いに独立して存在した作品と言えよう。

庄兵衛は喜助を弟殺しの罪人としたお上の判断に素朴な疑問を抱く。しかし、結局のところ「オオトリテ」（権威、権力者）に従うしかないと考えるところに彼の限界もあった。お上の判断を絶対視してしまうところは彼の個人的限界というよりも、むしろ時代的な制約を見るべきだろう。しかし、現在の我々がそうした制約から完全に自由であるかどうかはまた別の問題である。

41. 夏目漱石 『こゝろ』 2008年9月

「私」はなぜ今「先生」について語り出すのか。学校の先生でもなかったのに今でも「私」は「先生」と呼ぶことにこだわるのだ。

「先生」からの遺書には大きく二つのことが語られていた。

一つは、早くに両親を失い、その後面倒を見てくれた叔父に財産を横領され、人間不信に陥ったこと。それまで「先生」は叔父に対して何の疑いも抱いていなかったのである。

もう一つは、大学生の頃、友人のKから下宿先のお嬢さんに対する思いを告白されながらも、自分がKを出し抜く形でお嬢さんとの婚約を取り付けたこと。それからほどなくしてKは自殺する。結婚後もずっと「先生」は罪の意識に苛まれ続けていた。

「先生」は、「私は死ぬ前にたった一人でいいから、ひとを信用して死にたいと思っている。あなたはそのたった一人になれますか。あなたは腹の底から真面目ですか」と「私」に問いかけていた。その「先生」が遺書の中で、「私は何千万といる日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を語りたいのです。あなたは真面目だから」と述べる。「私」はいわば「先生」に選ばれた存在なのだ。「私」の側でそのことを誇る思いがあったことは否定できない。たとえ「先生」の自殺を悲しむ気持ちがあったとしてもである。

「先生」からの遺書は、「私」の父親の臨終間際に届けられた。親が亡くなったあと、親類を含めた肉親の間でどのような醜い争いが起こるか、「先生」はそれを自らの体験を通じて予測しえていた。しかし、若い「私」にはその認識がない。「先生」は今が「適当な時機」と判断し、捨て身の覚悟でそのことを伝えようとしたのである。それが自らの過去を告白するあの長い手紙だった。また、自らの過去を語ることは「私」との約束を果たすことでもあったのだ。

だが、「先生」のその願いは十分に生かされなかったであろう。なぜなら、「私」は遺書を受け取るなり、父親を見捨てる形で「先生」のいる東京へ向かったからである。その後いかなることがあったのか、「私」は決して語ろうとしない。しかし、沈黙を守るということ自体が「私」の心の傷の深さを逆に示しているはずである。

しかし、その「私」も、自分の言葉が「先生」を死に至らしめたという自覚はおそらくない。「私」は「先生」に過去を語るよう熱心に要求した。「先生」にとって過去を語ることは死そのものを意味していたのである。それは「先生」の奥さん（かつてのお嬢さん）の「それでは殉死でもなさったら」という冗談まじりの言葉が「先生」に自殺の引き金を引かせてしまったことと照応してくる。

言葉は重要な伝達手段であると共に、恐ろしい武器にもなりうる。それだけに言葉の使い手は慎重であらねばならない。『こゝろ』の作者はそう語っているように思える。

42. 田山花袋 『蒲団』 2008年10月

田山花袋によって明治40年に発表された『蒲団』は、その前年に島崎藤村が書いた『破戒』とはあまりに対照的だった。そこには社会性のかけらもなく、あるのは中年男の自惚れと嫉妬がないまぜになった心の葛藤であり、美貌の女弟子を失った喪失感を、彼女の使用していた寝具に顔を埋めて泣くことでしか慰められない男の哀れさであった。

竹中時雄は36歳。三人の子供を抱え、単調な生活に飽き足りないものを感じている。

その彼の前に現れたのが神戸女学院で学ぶ19歳の横山芳子であった。彼女は父親に連れられ、時雄のもとを訪れる。文学者としての時雄を崇拝する彼女は彼に師事したいと願い出たのである。彼女は思いもかけぬ美貌の持ち主だった。時雄の心は躍る。

時雄は、これからの女子は「新しい女」としての自覚を持たなければならないことを芳子に説いた。ところが、いざ彼女に恋愛問題が発生すると、時雄の心は動揺する。相手の田中は同志社を退学し、彼女を追って東京にやってきた。生活のあてもないまま、これから文学でやっていきたいという。

時雄の目には田中はつまらぬ男にしか見えない。彼の妻も芳子のことを「物好きだ」と揶揄しているほどだ。

芳子の保護者という立場上、時雄は芳子の父親に事情を打ち明け、東京に来てもらう。表面上は若い二人の「温情の保護者」として振る舞いながら、心の奥ではこの父親に反対してもらいたいと願う矛盾ぶりは滑稽ですらある。

父親は3年間様子を見ようと言う。その間は芳子を他の男性に嫁がせることはしない。その代わり、二人はそれぞれ離れて勉強に専念するよう提案したのである。それに納得できない田中はあれこれ理由をつけて、なんとか芳子と一緒にいようと画策する。

しかし、この二人が京都の嵯峨野で同宿した際に深い関係となったことが後に明らかになる。それまで二人はあくまでも清い関係であると主張していた。周囲を欺いていたことが明らかになった以上、芳子は父親の言葉に従い故郷に戻らざるを得ない。田中と芳子を引き離したいという時雄の願いは果たされた。しかし、それは同時に芳子を失うことでもあった。

時雄は自分に向けられた芳子の「崇拝」を「愛情」と勘違いしていた。妻がいなければ自分は芳子を貰っただろうと彼が思うのはこのためである。中年期にさしかかった男が若い女性に翻弄される姿がこの作品では描かれている。懊悩のあまり泥酔し、そのまま家の厠で寝込んでしまい妻に咎められるという醜態ぶりはペーソス（哀感）すら漂う。

芳子が去った今、彼女の蒲団を敷き、その匂いを嗅ぎながら時雄が涙を流す最後の場面において、この男のみじめさは隠しようもない。この告白小説が当時喝采を浴びたということが、我々に隔世の感すら抱かせる。

43. 泉鏡花 『高野聖』　2008年11月

信州から飛騨へ向かう旅の途中で「私」は一人の上人と道連れになる。高野山に籍をおく40代半ばの説教師で名を宗朝という。香取屋という旅籠屋で彼が「私」に語ってくれたのは、若かりし頃、飛騨の山越えをしたときに迷い込んだ孤屋（ひとりや）、そこで暮らす妖艶な女との出会いであった。

宗朝は不思議な体験をする。この孤屋に泊めてもらうことになり、女からの勧めで近くの滝で行水していると、やがて女が背後から近づいて来ていた。驚いたことに女は衣服を脱いでいたのである。そればかりではない。山道の途中で出会う蟇（ひき）や大蝙蝠に向かって、「お客様がいるんだよ」と話しかける。更には、動こうともしない馬の前で裸になり、その下腹を潜り抜けた。すると馬はすたすたと歩き出したのである。一緒に白痴の男が暮らしているというのも宗朝には解せなかった。

この女には誘惑性（エロチシズム）と母性、相反する二つの側面があった。前者の虜となったのは宗朝ばかりではない。後で親仁（おやじ）が彼に語ったところによると、男たちは次から次へと彼女によって動物に変えられてしまったという。旅の途中で出会った富山の薬売りもこの人里離れた村で馬となってしまったのだ。親仁は宗朝に言う。「妄念は起こさずに早うここを退（の）かっしゃい、助けられたが不思議なくらい、嬢様別してのお情けじゃわ」

もう一方の母性は、白痴の男に対して向けられる。彼女の父親は医者であったが、そこへ治療にやってきたのが当時子供であったこの男である。脚に大きな腫れ物があり、その手術を試みるも失敗し、今のようになってしまった。彼がこの娘になついていたため、彼だけしばらく逗留することになったが、村が大洪水に襲われ、この村で生き残ったのはこの娘と白痴の小児、それに親仁の三人だけとなった。それが今から13年前のことである。彼女とこの白痴が夫婦となったのは、ある面で無理もないことであった。

作品内で変身を免れたのは、宗朝、白痴の男、それに親仁の三人である。親仁は女を昔からの習慣で「嬢様」と呼んでいる。彼は白痴の男と同様、性的欲望からは一線を画されていた。

しかるに、他の男たちが動物に変身せざるをえなかったのは、彼らが彼女をまさに性的欲望の対象とし、そのように振る舞ったためではないか。彼女を欲望の眼で眺めたという点で、若き日の宗朝も例外ではない。だが、彼はもともと「臆病者」であり、その方面での具体的な行動力を欠いていた。しかも彼は修行中の身であった。また、富山の薬売りに反感を抱きながらも、彼が二股で誤った方向へ行ってしまったことに気づき、わざと見棄てることに気が咎め、それを追って旧道に入っていった。そこに彼の人柄も伺える。

女の「お情け」はその辺を見越してのことだったのかもしれない。

44. 樋口一葉 『たけくらべ』　2008年12月

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、この二人はかつて同じ育英舎で学んだ幼馴染みであった。しかし、思春期を迎えた今、彼らはお互いへの思慕の情を意識しつつも、自らが甘受せねばならない宿命をわきまえていたと言うべきであろう。

信如はお寺の息子である。成績も良く、どちらかというと寡黙な少年。学校の帰りがけに美登利がきれいな花を見つけ、それを背の高い信如に取ってもらおうと頼んだところ、周囲の目を気にする彼は、手近の枝を折って投げつけるようにして行き過ぎた。このようなことが度重なるにつれ、美登利はそれが自分に対する意地悪のように思われ、腹を立てる。このときの彼女には、思春期の少年の心の奥底を伺い知ることは無理であった。

美登利の姉は既に吉原の売れっ子となっている。そのため、美登利には多少のお金もあり、近所に住む年下の子供たちには気っ風のよさを見せている。彼女は子分ともいえる男の子たちが少なからずあり、姉貴的存在でもあった。彼女は多くの収入を得ている姉に対して憧れの気持ちを抱いており、自分も姉のようになりたいと願うのだが、いったい自分がどのような仕事に就くのかは分かっていない。

あるとき、美登利の配下の男の子が別のグループの子供からのいじめに遭う。これを知った美登利は立腹する。しかも、その相手グループの頭目が信如であるという話（これは信如にとっては心外なことであったのだが）も聞かされた。こうして信如と美登利との溝は決定的に深まってしまったのである。

その二人が一度だけ接近しかかったことがあった。雨の中、家から美登利が外を眺めていると、下駄の鼻緒を切らしてしまい難渋している人影があった。さっそく母親に断って友仙ちりめんの切れ端をもって外へ出た彼女はそれが信如であることを知る。ふっと振り返った信如も、彼女の存在に気づく。雨の中外に飛び出した娘を呼ぶ母親の声で彼女は家へ戻らざるをえない。再び信如が振り返ったとき、足元に残されていたのは雨にぬれた友仙だった。

後に美登利は急に気鬱になる。彼女を好いていた弟分の正太にはその変貌ぶりの理由が分からない。身体の具合が悪いのかと心配もする。だが、彼女の母親は意味ありげに微笑するだけだ。美登利はこのとき以来、もはや「子供」ではなくなったのである。

信如も僧侶になるべく、家を離れて行った。美登利もまもなく吉原の女となるであろう。決して結ばれない宿命を負った二人の男女の間で取り交わされたひとときの交情。十分に互いの会話がなされない分、そこには無言の語りがあった。彼らにとって「子供」でなくなるということは、別れの時期を迎えることを意味していたのである。

45. 有島武郎 『カインの末裔』 2009年1月

広岡仁右衛門は周囲から＜野蛮人＞と見られており、極めて紳士的だった作者とは余りにも対照的な人物のように思われる。しかし、有島は自らの分身として本能的人間を描いたと後に述べている。作者にとって、仁右衛門を造型することがある意味において自己解放だったのかもしれない。

「カイン」は旧約聖書『創世記』に登場する人物であり、嫉妬のあまり弟のアベルを殺害したことが神に知られ、放浪を余儀なくされた。彼はもともと農耕者だった。仁右衛門が＜カインの末裔＞たる所以がここにある。

彼は松川農場に入ってからもその粗暴ぶりが際立っている。このため彼は周囲から孤立するのだが、この粗暴さは果たして先天的なものだったのだろうか。

彼は文字がまともに読めない。農場の事務所を訪れた際、契約書をもとに説明を受けていても彼は真剣に聞こうともせず、ただめくら判を押し、心の中で（糞を食らえ）と思っている。農場を訪れても、唯一の縁者である川森爺さんへの挨拶もしない。

仁右衛門をこのようにさせた根本の原因は教育の欠如にある。作者の心の中にはそのような思いが強くあったのではないか。有島は紛れもなく札幌農学校で熱心に教育を行っていた人間であり、そのことを強く感じていたのだろう。人間は社会的存在である以上、他者との関わりを避けることができない。そこには必ず規範と言うべきものが存在する。残念ながら彼はそのことを十分教えられる機会もなく、大人になってしまった。

その粗暴さの反面、彼が残忍なことをやりかねない自分の心を恐れたり、自分の「智慧」の足りなさを感じたりしている場面があることは注目される。そしてまた、後に深い関係となる佐藤与十の妻と初めて会ったときに見せた「罪のない顔」、あるいは倶知安の居酒屋を訪れた際の上機嫌で冗談口をたたく彼の姿を見て周囲の者が集まってきている場面を作者が周到に書き入れていることも忘れてはならないだろう。

彼は自分が播いた種で自らの立場を孤立させていくし、赤ん坊が赤痢で亡くなり、馬が競馬で前脚を折るなど、災難が降りかかったときも責任を転嫁させる傾向がある。もう絶体絶命と思ったとき、彼は一発逆転を狙って函館の場主の邸宅を訪れるが、小作料を納めないでいた人間が農民たちのために小作料の軽減を訴えても相手にされないのは当然のことであった。このとき場主に言われた「馬鹿」という言葉は彼を打ちのめした。彼はこの言葉によって自らの置かれた立場、自分という人間を思い知らされたのである。

知識のない彼はそこから知恵を働かせる術を持ち得なかった。周囲の蔑視を感じるがゆえにますます粗暴になっていく。その悪循環から彼は逃れられなかったのである。

46. 菊池寛 『真珠夫人』 2009年2月

『真珠夫人』においてヒロインとも言うべき荘田瑠璃子（旧姓・唐沢）は若き未亡人として、豪邸に男たちを集めて妖婦ぶりを発揮している。だが、一見華やかなこの生活に誰よりも飽き足りないものを感じていたのは他ならぬ彼女自身であった。「妾（わたし）は戯恋（フラート）することには倦（あ）き倦きしましたのよ」彼女は渥美信一郎にあてた手紙の中でこう述べる。これはただ単に相手を誘惑するための方便とは言い切れない。二年前に恋人杉野直也との別れを余儀なくされ、いわば復讐のため、親子ほども歳の離れた荘田勝平のもとに嫁いできた彼女は、心の奥底で本当の愛を実は求めていたのではないか。

復讐の対象であったはずの勝平は嵐の中、瑠璃子を守ろうとする知的障害者の息子勝彦に襲撃され命を落とす。こうして彼女に残されたのは勝平と先妻との間に生まれた二人の子供（勝彦と美奈子）、それに莫大な財産だった。本来の復讐相手を失った彼女は、その後男たちへとその対象を広げていく。彼女には彼らを魅了してやまない美貌と知性、上品さがあった。事実、多くの男たちは彼女の虜となる。その中で彼女はいつしか男たちを翻弄する面白さそのものへと惑溺していったのかもしれない。

彼女は娘となった美奈子を実の子のように可愛がっていた。彼女は外に対しては〈妖婦〉であったが、内にあっては〈優しき母〉に徹したのである。それだけに自分が翻弄した青木稔に対して美奈子が淡い慕情を抱いていたことを知ったときの衝撃は大きかった。男たちに対する意地と反発で行っていたことが、結局のところ一番愛している娘を傷つけていたという皮肉に彼女は向き合わざるを得なかったのである。

もともと彼女が美奈子と共に箱根へ向かう際、稔を伴ったのも、彼に対する特別な思いがあったわけではない。兄の青木淳が瑠璃子に翻弄され、最期に彼女を呪って死んでいったことを知る渥美信一郎から、弟には同じ轍を踏ませないでほしいと頼まれたことに彼女が反発したためである。この信一郎は弟の稔にも直接忠告をするが、そのとき既に稔は失恋をした直後であり、その言葉は火に油を注ぐ結果にしかならなかった。その点で渥美信一郎は作品の要所要所において重要な役割を果たしていると言えよう。

稔は瑠璃子を刺殺し、自らも入水自殺を図る。瑠璃子の死はいわば自らが招いたものだった。彼女の死後、その肌襦袢にしっかりと杉野直也の写真が縫い付けられてあったことが分かる。世間的には〈妖婦〉と見られながらも操を守り通し、心に「真珠」のごとき心を抱いていた瑠璃子。その麗しき姿は、家を飛び出して画家となった彼女の兄唐沢光一の描いた力作『真珠夫人』という肖像画の中に永遠に納められたのである。

47. 尾崎紅葉 『金色夜叉』 2009年3月

「可いか、宮さん、1月の17日だ。来年の今月今夜になったならば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから」熱海の海岸で貫一は宮に向かって言う。この台詞であまりにも有名な『金色夜叉』を実際に読んだことのある人はどの程度いるのだろう。

作品を読んでいて腑に落ちないのは、なぜ宮が結果的に貫一を裏切ることになってしまったのか、その理由がよく分からないことである。貫一は早くに両親を失い、かつて父が世話した鴫沢家で育てられている。学資の面倒も見てもらった。そこの娘が宮である。二人が結婚するということは、鴫沢の家では誰もが了解していたことであった。

その宮を見初めた男がいた。正月のカルタ大会に現れた富山唯継がその人である。金剛石（ダイヤモンド）の指輪をはめた彼の登場は人々の注目を浴びた。彼の目的はカルタ大会に参加することではなく、花嫁候補を探すことにあった。その彼の眼鏡にかなったのが宮だったのである。

後日富山は結婚を申し入れてくる。鴫沢夫妻は宮に富山との結婚を無理やり強要したわけではない。それだけに、鴫沢隆三から娘が富山の申し入れを受け入れたと聞かされたことは、貫一にとって全く寝耳に水のことであっただろう。この結果、貫一は姿をくらまし、立身出世の道を捨て高利貸の手代となって後年姿を現す。金のために裏切られたと思い込んだ貫一は、その金に執着することで自らの人格そのものを変貌させようとしたのである。破談の結果がいかに彼の心を狂わしてしまったのかが十分伺える。

「新続金色夜叉」の中で、女が男に惚れるには「見惚」「気惚」「底惚」の三様があり、23、4歳ぐらいにならないと心底から惚れることはない、とお静から聞かされ、貫一が大いに頷く場面がある。このとき、貫一の脳裏をかすめたのは5年ほど前の宮のことだろう。少なくとも貫一は当時の宮が年端も行かず、深い思慮が足りなかった、とこの場面では納得しているのである。当時、宮の美貌は際立っていた。正月のカルタ大会で人々の注目を浴びたのは美の象徴である彼女と、富の象徴である富山の二人である。そのことを宮も十分意識していたであろうし、その一方から結婚を申し込まれ、彼女の心が大きく揺すぶられたのではないか。

そもそも若い男女が出会える場が極めて限られていた。貫一と宮も同じ屋根の下に暮らす半ば家族のようなものであり、それまでに他の異性を知っていたわけではなかった。宮を「姦婦」とまで言い切って罵る貫一の態度は、裏切られたという思いがあったにせよ、やや常軌を逸していたと言わざるを得ない。宮に非難されるべき点はあった。しかし、それを身体全体で受け止めることができず、妄想に駆られて相手を罵ることしかできなかった貫一という人間の姿は忘れるべきではない。

48. 島崎藤村 『新生』 2009年4月

妻の死後、家の手伝いに来ていた姪と関係を持ち、彼女を妊娠させた事実を告白した小説。それが島崎藤村の『新生』である。

この小説は「東京朝日新聞」に連載された。この作品の特異さは題材のみならず、姪との衝撃的な関係を紙上に発表した後も執筆が続けられ、その後の展開をも取り込んでいったところにある。

岸本捨吉は姪の節子から妊娠を打ち明けられる。これに動揺した彼は留学と称してフランスへ旅立つ。これは逃避以外の何ものでもない。そして船の中から次兄の義雄（節子の父）に手紙でようやく事情を打ち明けることができた。義雄からは「お前はもうこの事を忘れてしまへ」という返事が後日くる。この言葉に捨吉は救われもした。事実節子の妊娠は秘密裏に処理される。

三年後、捨吉は帰国する。滞仏中、節子からは頻繁に手紙が届けられたが、彼はそれらを殆ど無視した。いざ帰国してみると、彼の目に映ったのは生気を失った節子の姿である。彼女に憐憫の情を催された彼は、こともあろうに再び彼女との縒りを戻してしまう。そして彼はアベラアルとエロイズの関係に自分たちを擬し、節子との性欲を超越した精神的な関係を目指そうとするのだ。自分たちの関係を小説の中で告白するという大胆な行動も、その考えに基づいたものである。しかし、アベラアルとエロイズの関係を名目にしたこと自体、姪との関係を解消しようとする狙いがあったのではないかとの疑いは拭いきれない。

ある日、義雄は捨吉の前で「岸本の家の名誉に比べたら、節ちやん一人の間違ひぐらゐは何でもないことだ」と言い放つ。捨吉が節子との関係を綴った「懺悔」の稿が新聞紙上で連載され始めるのは、それから間もなくだ。

いったんは次兄からの手紙で救われたと思った捨吉であった。しかし、次兄の態度は弟や娘を思いやる心根から出たものではなく、ひたすら岸本の家の名誉を守ろうとする保身の論理に他ならなかったのである。自分の娘がその犠牲となってもそのことを意に介そうともしない倫理的鈍感さに捨吉はおののいたに違いない。捨吉が姪との関係を告白する挙に出たのは、一つの事件をきっかけに露わとなった岸本家の問題を剔抉し、訴えようとする意志が強く働いていたからである。作者藤村にとっても、このような展開そのものは連載当初には思いも寄らなかったことであった。

作品の公表後、周囲は慌ただしくなる。次兄からは義絶の手紙が届けられ、姪は台湾へ送られて行く。彼女は叔父との距離が遠く離れても二人の関係が永遠のものであることを信じて疑わない。その姿はいじらしくもある。

『新生』の発表は島崎藤村にとって世間からの抹殺をも覚悟したほどの、大きな賭けに他ならなかった。その危機を潜り抜け、やがて『ある女の生涯』や『夜明け前』誕生の糸口を掴んだところに彼のしたたかさがある。

49. 武者小路実篤 『友情』 2009年5月

『友情』は多分に漱石の『それから』を意識して書かれた作品と言えよう。作者は友情のために自らの恋を封じ込めることなく、むしろ自分の感情を偽らない青年像をここで描こうとしたのである。

野島は写真を見たときから、友人仲田の妹杉子に恋をする。杉子の言動の一つ一つに一喜一憂し、そのたびごとに親友の大宮に報告する様子はいじましいほどだ。しかし、後に杉子が語っているように、野島は自分が思い描いた、いわば理想化した杉子を恋していた。それが彼女に嫌悪感を抱かせる大きな要因となったのは言うまでもない。

杉子は自分の思いを貫くという点で『それから』の三千代とは明らかにタイプの異なる女性だった。作品でしばしば自分に対する彼女の態度に物足りなさを野島が覚える場面が描かれているが、彼女の思いが当初から大宮の方に向けられていたことを考えると、このこと自体は何ら不思議ではない。大宮が絶えず自分に対して冷淡な態度をとったばかりか、留学と称して急に西洋へ旅立って行った理由が彼女には解せなかった。しかし、一年後人を介して野島から結婚の申し込みを受けたことで彼女は初めて全てのことを理解する。彼女は勿論この申し込みを断った。野島はそのことに釈然としない思いを抱くが、ここに彼女なりの野島に対する配慮があったことをこの時点で野島は知る由もなかった。

大宮の真意に気づいた彼女は、この後遠隔の地にいる大宮に熱烈な思いを込めた手紙を送り続け、ついには彼の気持ちを揺り動かす。このようにこの作品では彼女の一途さが殊更際立っていると言えよう。

大宮は野島の親友であり、その大人としての振る舞いから野島の絶大な信頼を受けてもいた。そのことが大宮を窮屈な立場に追い込んでしまったと言える。野島から杉子への恋を打ち明けられた彼は、自らの思いを打ち消し、ひたすら野島の〈友人〉として彼の恋を成就させようとしていた。しかし、ここで彼が守ろうとした〈友情〉そのものがまやかしでしかないことは、後に杉子が大宮への手紙の中ではしなくも述べていたことだった。

彼が最終的に杉子の愛を受け入れたことは正しかったと言えよう。そのことは、野島との〈友情〉を必ずしも壊すことにはならない。むしろ二人は新しい〈友情〉を育てるべき段階に入ったと言うべきか。

大宮は「すべては某同人雑誌に出した小説（？）を見てくれればわかる」とだけ野島への手紙で書いた。その小説は実名入りであり、杉子が野島を嫌悪する激しい言葉もそのまま書かれていたのである。杉子が大宮個人にあてた手紙の内容をそのまま小説という形で公表するということは、杉子をも踏みにじる行為と言えないだろうか。この一点だけはどうしても疑問を抱かざるを得ないのである。

50. 川端康成 『伊豆の踊子』 2009年6月

「私」にとって伊豆で旅芸人たちと行動を共にしたことは、計り知れない大きな意味をもった。そもそもはその中の踊子を見初めたことがきっかけである。

「私」は旅先で買った鳥打帽を被り、一高の制帽はカバンの中にしまった。「私」にとって彼らの中に入るには一高生という肩書きは邪魔なものでしかなかったのである。こうして「私」は旅芸人たちの視点で世間を眺めることができたと言ってよい。旅芸人たちを「あんな者」と蔑む茶店の婆さん、あるいは「物乞い旅芸人村に入るべからず」という村の入り口での立札。「私」はこのように彼らを取り巻く厳しい現実の一端に触れるのである。

当初「私」は踊子が17、8歳ぐらいだと思い込んでいた。彼女は客の前で太鼓を叩いている。太鼓の音が止むと彼女が汚されるのではないかと「私」は懊悩する。しかし、後に彼女は14歳の娘であることが分かった。彼女のあどけなさは川向こうの共同湯に入っていたとき、こちらを見つけ真裸のまま飛び出す姿に象徴されている。

「私」と踊子が互いに惹かれ合っていたことは作品内からも十分窺える。そのことも周囲は気づいていたようだ。踊子の兄である栄吉が、別れの際「私」にカオールという口中清涼剤を贈り、「妹の名が薫ですから」と言った場面からもそれは明らかである。だが、二人で活動（映画）を見に行くことを「おふくろ」が承知しなかったことからも分かるように、二人にはある種の抑制が働いていた。だからこそこの作品に抒情が成立したと言えるのかもしれない。

もともとは孤児根性に苦しむ自分を何とかしたいという思いから一人旅に出た「私」であった。それだけに、背後から自分のことを「いい人」と評する踊子たちの会話が聞こえてきたことは、「私」の心に浄化作用をもたらした。

結末の場面、出立の朝、乗船場で「私」は婆さんを東京まで連れて行ってくれないかと土方風の男に頼まれる。婆さんは乳呑児を背負い、その他に二人の幼い女の子を連れていた。倅夫婦が流行性感冒で死んでしまい、孫が三人残されたという。国の水戸へ帰すことになったのだが、そこまで送ることができず、「私」を見込んで頼んだということだった。

「私」はこの申し出を快く引き受ける。このとき「私」にはこの幼い孫たちがそう遠くない時期に〈孤児〉となる姿が見えたのではないか。だとすれば、「私」は彼らの中にかつての自分を見出したのだと言えよう。「いい人」と言われたことで孤児根性から脱却できた「私」は、今だからこそ孤児への慈しみが生まれたのである。そこには確実に変わった「私」の姿を垣間見ることができる。